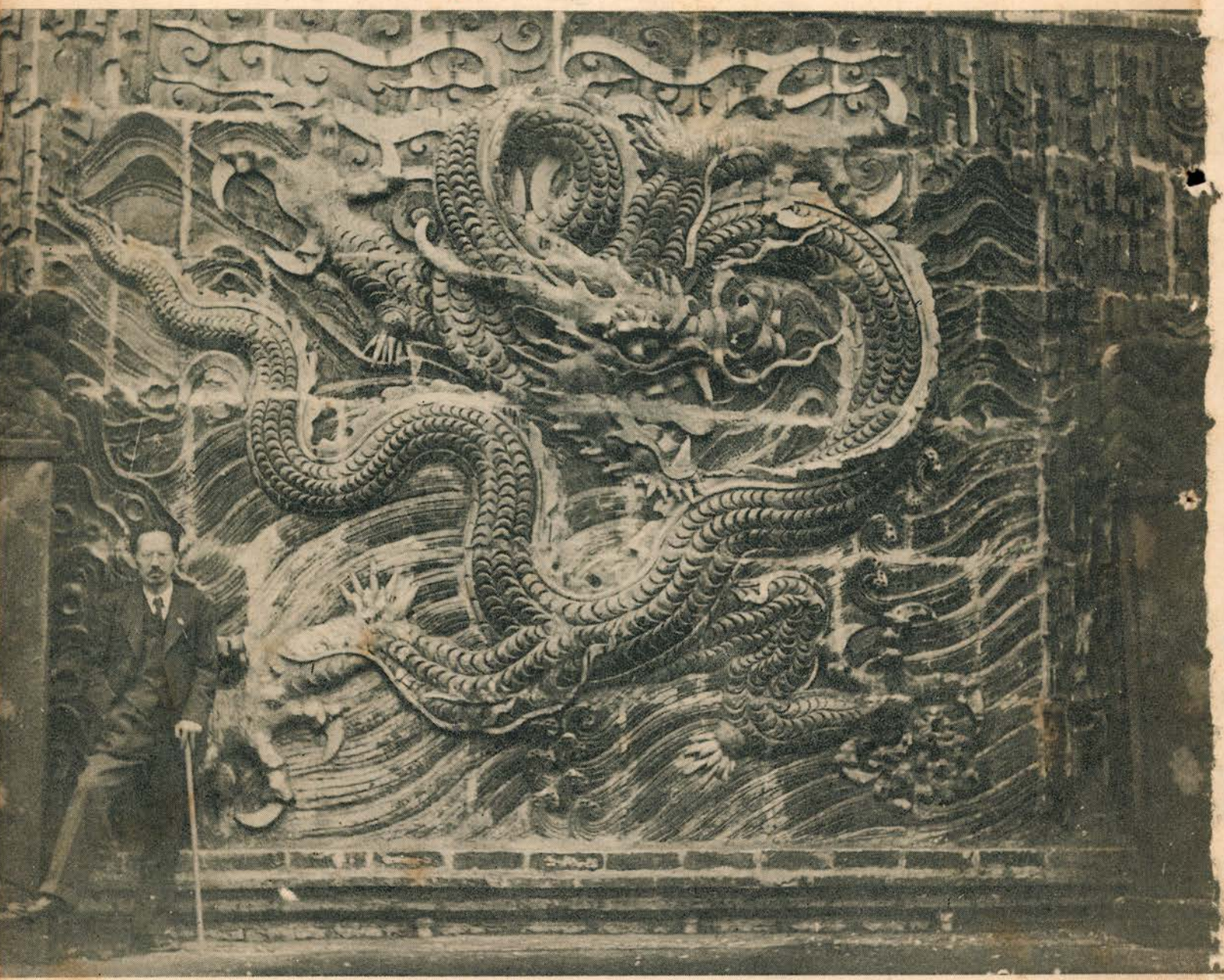
宰主★郎路生麻

法の雑柳川



Pesoi flugas trans
la landolimon

192

15年

★最高權威の月刊柳誌

川柳雜誌 新春號目次

表紙寫眞…（大同・九龍壁）…岩崎柳路（一）
内外時事…（一）
ABE首相と米國の新聞…古川風竹（二）
滿蒙開發…小山文三（一四）
云ひたい事を云ふページ（其一）…東魚・五健・白面人（一一）
月評 川柳一ト筋…路郎・艸樂・かほる 鮎美・豆秋・鋭々 孤蓬・白面人・亞鈍（一八）
伊勢から熊野路へ…佐々木三福（一四）
笠森稻荷考（一）…麻生路郎（二）
一茶の六代目…福田山雨樓（一四）
云ひたい事を云ふ頁（其の二）…半疊・水客・三福・柳石・一歩 柳秀・文三・かほろ・美笑・双虎 虻の麿・潮花・曉明・紫香・文庫 斗風・八歩・右門・由布（四）
武玉川四篇研究（三）…梅本秋の屋 森東魚 蛭子省二（八）
「朝鮮雜記」を讀みて…姜弘龍（一五）
云ひたい事を云ふページ（其の三）…夕鐘・惊影 山雨樓・某人 孤蓬・不水（三）
川柳二千六百年史…戸田孤蓬（三）
凩やの辭世問題に關聯して…蛭子省二（一六）
貝釦…岡田某人（一四）
云ひたい事を云ふページ（其の四）…銃人・豆秋 波夢造・鮎美（二一）
上海だより…植村九天（一六）
同情週間川柳大會…（一〇）
云ひたい事を云ふページ（其の五）…生々庵・春巣（三）
吟行高槻から枚方まで…（一七）
近作柳樽…麻生路郎選（四）
川柳塔…麻生路郎選（一〇）
同舟近詠…諸家（三）
不朽洞近詠…麻生路郎（一）
一三ヶ日…須崎豆秋選（一）
路集畫風…姫田夕鐘選（三）
各地柳壇…（三三）
柳界展望…（三三）
川・協…（一一）
後記…（二八）
社關係の人々…（二八）

★兵士は戰線に！ 我等は銃後に！

アサヒビール
大日本麦酒株式會社

皇紀
二千六百年を
壽ぐに
我等の
アサヒビール
で乾盃いた
しませう！

キングレコード
今評判の流行歌
明快！恍惚の朗唱．
岡晴夫
上海の花賣娘
あの街も――
この街も――
償い人氣の
花賣娘！
川俣榮一・作詞
上原げんと・作曲
樋口靜雄
支那の花嫁
男のいのち
筑波高
ヒット
御愛聽下さい
41

船の旅
大陸は招く
滿・支・蒙への
OSKライン
大阪商船
―案内書進呈―

世界一周航路新造船
あるぜんちな丸姉妹船
ぶらじる丸
今春一月處女航海

昨夏七月十五日處女航海の途に就いた世界一週航路新造船あるぜんちな丸は十月十六日船腹に描いた日の丸も輝しく故國に凱旋いたしました

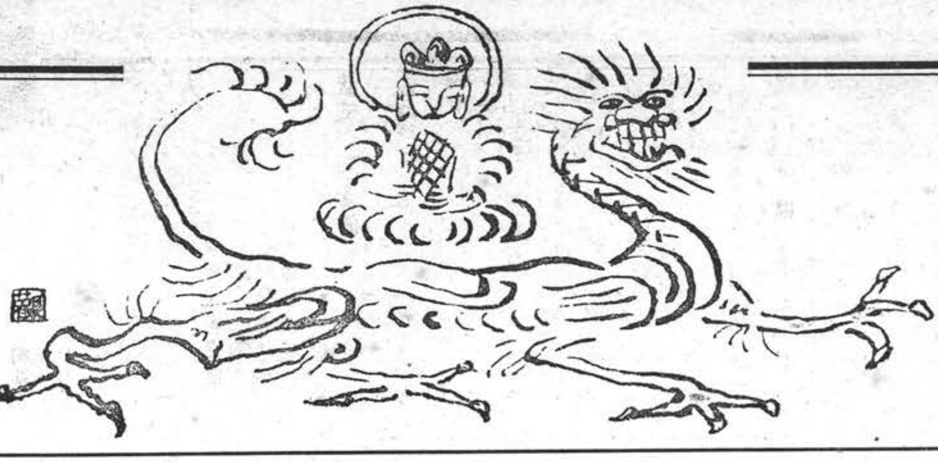
冬は温泉へ！
南紀の温泉　近くの温泉
紀州 泉質日本一 龍神（南部よりバス）
療養向 椿（紀伊椿よりバス）
療養向 湯峰（朝來よりバス）
療養向 湯川（湯川よりバス）
紀の松島 勝浦（勝浦下車）
炭酸鐵泉 天見（天見下車）
稍谷渡踏を兼ねて（ハイキングを兼ねて） 錦溪（三日市町下車）
小川（尾崎下車）
海一幹 淡輪温泉（淡輪下車）
お家族づれの樂園 大濱汐湯（劇ニュース映畫）
難波より毎日直通運轉
南紀樂園 泉質日本一 白濱・湯崎
南海電車

川柳★雑誌

第十七巻　第一號

謹・賀・新・春

皇紀二千六百年



ABE首相と米國の新聞

古川風竹

◇阿部大將が首相となつての直後アメリカの有名な新聞の短評欄に、こんな意味の記事を見た「日本の新總理アベは好感が持てさうな男だ。我々新聞人には彼の苗字がABEといふ、極めて短かく明朗であることが氣に入つた。これは新聞の見出しに大へん都合がよい。寫眞で見ると正直さうな顔だアベはHONEST ABE（正直エイブ）であるかも知れぬ。ぜひ一つ正直外交で日米國交を是正して貰ひたい」

◇「正直エイブ」とは米國の偉人エブラハム、リンカーンの愛稱「HONEST ABE」への洒落である事は言ふまでもない。阿部さんは登場早々、日本の軍部には餘り好感を持たぬ米國の新聞から名前の短かいことを喜ばれた。

◇どこでも、さうであるが、新聞の見出しは簡潔達意である事を尊ぶ。現大統領ローズベルト氏の如きはROOSEVELTと九文字もあるので厄介視され新聞の見出しにはフランクリンデラノ、ローズベルトの頭文字を取り簡單にFDRを用ゐてゐる。先代のテオドル、ローズベルト氏も同樣にTRでアッサリ片づけられたものだ。

◇苗字と云へば、隨分古い話しであるが、「日露戰爭の當時、ある米人が日本の偉い政治家や軍人は、皆苗字が短かい。これはどういふ譯か」と訊ねた。

◇私はこの珍問の意味が判らず「それはどう云ふ譯か」と鸚鵡返しにきくと彼は「見給へ、日本のリーダーはITO, TOGO, NOGI, NOZU, URIU, OYAMA, KATO など、みな短かい姓の持主ぢやないか」と言ふ。

◇なるほど、之は我々の、ちよつと氣附かぬ所だ。東郷にしろ野津にしろさうとう字劃が多く日本人には、ミヤスイ苗字とは思へない。ところが之をローマ字にすると、とても簡單で漢字とは正反對である。

◇然るに川上とか、山下とかは字劃の少ない苗字であるがローマ字に綴ると頗る長いものになる。阿部首相は、この點大に惠まれてゐるわけだ。

◇話は變るが、この春、日本でローマ字綴を改正したとき、親日の某米人はFUJI IYAMAがHUJI又はHUZIに變へられたので冨士ヤマに對する親しみが薄らいだと云つた。日本郵船の秩父丸も新ローマ字法でTITIBU MARU と塗り替えて來たが、ホノルルでも、桑港でも『チチブ』と讀む米人は無く、皆「タイタイブ、マル」と發音するので次航海から鎌倉丸と改稱したなどは笑ひ事ではあるまい。

◇苗字では面白いことがある。先年故加藤友三郎大將が華府軍縮の歸るさ、ホノルルに寄港した。さる人へのサインにT, KATO, NIHONJIN と書いたものだ。日本人である加藤さんがなぜ、わざわざ「日本人」と書いたものかと、質してみると米人はKATOを「ケイトー」若しくは「ケートー」と發音するので俺は「毛唐」でない「日本人」だと云ふ洒落であつた。

◇今、ホノルルに大内と云ふ齒科醫がある。其看板にDR, OUCHI とあるを見たウイッテーな米人が「この齒科醫の治療は、きつと痛いに相違ない、名前からしてOUCHI（アウチ）だ」と云つた。洒落の說明は野暮だが、許して貰へばかういふわけ……アメリカ人は、足を踏まれるとか、齒を拔かれるとか、きやつといふほど痛いときには「アウチ!!（OUCH）」と叫ぶのである。

◇さて、だいぶ長く書いたが、今一つアメリカ種のユーモア實話を、もつて筆を擱かふ。

◇故埴原正直さん（米國外交界での愛稱はハニー）が駐米大使の頃、夏の蒸著い、ある日、米國外務省に、特に入魂のアデー第二次官を訪ふた。「イヤ今日はばかに暑いですね。今、お役所の階段（外務省の正面階段は二十段位ある）を登つて來るに片足を上げるのも大儀でしたよ」とやると、アデー次官は、すかさず「ハニーさん、アナタはCENTIPEDE（百足）でなくて幸ひでした」と返した。埴原さんは、この洒落が即座に解けず「全く、さうですなハ、、、、」でお茶を濁して大使館に歸つた途中車の中で、ハニーさんは、センテピードの洒落が讀めて、こんどは、本當に「ハ、、、」と獨笑した。「アデーさんは巧いことを云つた。なるほど片足を上げるさへ大儀なのに百足（センテピード）では、やり切れぬからなあ」と再び悅に入つた。

云ひたい事を云ふページ（其の一）

私の父

森東魚

「あれは呉服物だけ賣つてゐれば良いのだ、何も荒物屋みたいに何んでもかんでも獨り締めにする事はねエ、小商人泣かせと云ふものだ。」これは百貨店三越が華かな進展を見せた時に投げつけた江戸の生き殘りの一人である私の親爺の憤慨の言葉なのである。單純であるが何か考へてやつてゐる物があるやうに思はれる。

「佛壇の中へでもはいつたやうだな」これは創立當時の帝劇へ行つた芝居好であつた私の親爺の啞然たる歎聲である。建築を學んだ悴私への頂門の一針であると思はれぬでもない。

正月に死んだ親爺、酒と心中したやうな親爺。酒供養、酒供養だ、親爺遺愛の杯でしみじみ飮むそれが私の正月だ。

統制にちと盃の大き過ぎ

★

前田五健

「調息觀心究眞機」光輝二千六百年の新春も一歩一歩漸進主義は不動です

手毬唄

石井白面人

時——大正初期のある年の新春
場所——大阪島の内
人物——子供大ぜい

手毬をつきながら賑やかに歌つてゐる。「一ィ二ウ三イ四ウ鎧の人形顔赤え、赤鐔の吸物蛸の足、おあし難波のなんぜん寺何でそないにおしやんすえ、おしやんす長持挾箱、重箱文筥奉る、たてます提灯にぎやかに、にぎやか陀羅助櫃によし、しやくのお山はみな天狗、天狗とろとろ初寅や、虎屋の羊羹豆杓子杓子の穴から天覗く、のぞ栗三年柿八年、柚は九年の花盛り丁度一貫つきました。

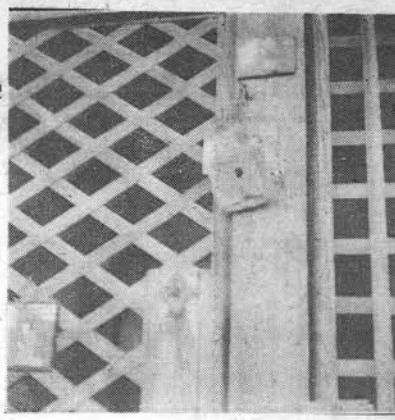
★內外時事★

☆鐵、厚兩相專任相補充（廿九日）
鐵道大臣　從三位勳二等　永田秀次郎
厚生大臣　正五位勳一等　秋田清
★吳佩孚將軍逝く（十二月四日）
☆明年度豫算總額百三億六千萬圓と決定、（九日）
★無聲映畫時代の英雄ダグラス・フェアバンクス氏死亡、享年五十五（十二日）
☆國際聯盟ソ聯を除名（十四日）
★獨逸豆戰艦グラーフ・シュペー號はモンテヴイデオ港外で自爆（十七日）
☆第七十五議會召集（廿三日）
★暴利行爲取締規則改正（廿六日）

不朽洞詠近

麻生路郎

買溜めよ自爆こいふを御存じか
ホンの僅かの買溜めの眞劍さ
買溜めるよりはこ粥もうれしき日
買溜めに嫁の里まで手を廻はし
買溜の嵩を云ひあふ蘆屋村
一錢のマッチへ五軒ほごあるき
豊葦原瑞穗國七分搗
佛飯へだけはこの母の心遣り
我々が今食ふ米へ閣議也
うちで食ふ米を米屋が意識する
偏在さなごこ知つたかふりを云ひ
米櫃へ子等まで騷ぐ年が暮れ
酒なしデーの元旦は來し
貸借も二千六百年の春
初日拜む女よマスク取りたまへ



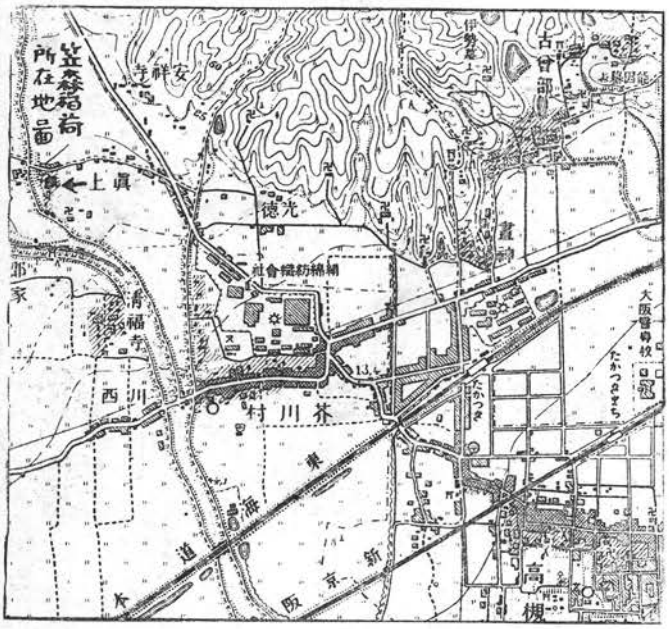
笠森稲荷考（一）

麻生路郎

瘡守の名の由來

江戸時代、谷中の感應寺（後に天王寺と改稱、日蓮宗）と大圓寺との兩境内に瘡守稲荷と呼ぶ社詞があつて、黴毒患者が治癒を祈願するために押しかけて大いに繁昌した。ところで、この神様の本名は笠森稲荷であつたのを、いつのほどにか瘡守稲荷にされ、瘡を守る稲荷なら、勿論黴毒にも御利益があらうと、こうう黴毒專門の神さまに祭り上げられてしまつたので、何も御存じのないお稲荷さまこそ驚かれたに違ひない。

しかし、笠森稲荷が瘡守稲荷に轉化してお門違ひの神様にされてゐるやうな例は尠くないのである。播州明石の人丸神社が歌聖柿本人丸を祀つてあるので、人丸はヒト、ウマルに通ずるところから安産火伏の信仰が行はれるに至つたし、阪急沿線服部の天神さまは御本體が書き繪の天神さまであるところから、脚氣の天神さまにされ脚氣患者に治癒を祈願される始末、下の病ひや緣結びの神さまとして信仰されてゐる石神さまが咳の神さま、百日咳に効驗あらたかであるとされてゐるのも、多くは其の音が通ずるところに起因してゐるのである。



瘡守稲荷に本社がある

この瘡守稲荷の本社、笠森稲荷は「攝津名所圖會」によると島上郡（現今の三島郡の一ところ）の眞上村にありと記されてゐるが、現在の呼稱ではない。しかもこの襷の下部に檜大樹は周圍が二丈餘もあつてありし昔を偲ぶのに充分である。

社名に笠の字を冠せるは、此の笠（賀佐氏）に因めるなりとある。一說に神社のある所の森が笠に似てゐるので笠森稲荷と云つたのであると云はれてゐるが社名の笠森の笠は古い奉納額に「加佐森神社」とあるのを見ても前說を信じていゝだらう。

江戸に勸請された笠森稲荷が瘡守稲荷といつの間にか改稱され、はじめて黴毒の神様として信仰されるやうになつたのかと云へば、そうではない。本社の笠森稲荷は既にそれ以前に瘡神さまとして信仰されてゐたのである。

尤もこの瘡神さまの瘡は古語の「かさ」（瘡）の謂ひで、皮膚發疹病の總稱である。

「攝津名所圖會」卷の五に、

笠森稲荷祠

眞上村にあり世人瘡神と稱して土の團子を供じ瘡毒を病もの遠近よりこゝに來つて祈願す笠と瘡と訓を通ず京師四條坊門の西に延喜式に出たる隼神社ありて世人隼を謬て早瘡と稱し又轉して瘡神と呼ぶこれにも土の團子を供じ小兒及び瘡疾に苦しむもの多く祈願すれば神は信敬によつて利生あり一心の謹啓に頭をかたむけ再拜怠らずんばなどか感應空しからんや

笠と瘡まぎらかしても利生あり雨露をもらぬ神の惠に　斑竹

とあり、又寶永版の「懺悔男」の中にも

「津の國芥川のほとりに稲荷の宮あり、この神は人の病苦を救ひ玉ひ、出物腫物何にとりてもその驗し數ふるに盡きず、それ故世人瘡神さまと申す」

とあるによつても明らかであらう。現在でも社前には土の團子が供じられてゐるところを見れば一部の人たちにそうした信仰が繫がれてゐるを見ていゝだらう。

瘡守稲荷の二社對立

もと〳〵笠の「かさ」が古語では皮膚發疹病の總稱であつたにしても、江戸では再轉化して黴毒の神様となつたのは事實で、元祿の頃から江戸では非常に黴毒が蔓延して、それを普通に「かさ」と呼ぶやうになり、それ等の患者が瘡守稲荷が瘡神さまだといふので押しかけるやうになつたのである。黴毒の神さまになつてからの瘡守稲荷は層一層繁昌したが殊に目立つて流行したのは寶曆の頃からである。

そして黴毒の神さま瘡守稲荷が谷中の感應寺と大圓寺の兩境内に對立してゐるところから双方とも患者を多く引き寄せやうといふ競爭から遂には瘡守といふ名稱の優先權を爭ひ寺社奉行に訴訟に及んだことさへあつたのである。

筆の序でに、この兩瘡守稲荷の沿革を洗つて見ると、感應寺の境内にある瘡守稲荷は

事務家は待望す
2600年
卓上日記
OS
全國便箋本舖
岡本ノート社
電話 東京下谷608 大阪東518

笠森稻荷社南方よりの遠景←

天正十二年、長久手の戰ひの時に德川家康が腫物を患つてゐたので家來の倉智甚左衛門が笠森稻荷に祈願し靈驗があつたので、その後、家康に從つて江戸に移つてから谷中の感應寺の西の方へ、攝津の芥川のほとりの笠森稻荷を勸請したのである。

それが享保の頃になつて感應寺の境內に移轉したのだ。

「寛天見聞記に

寛政五六の頃、谷中の笠森稻荷を世に瘡守と稱して、諸瘡の平癒を祈願する多し。願を懸る時は土の團子を獻じ、願成就して米の團子を奉る。門前の水茶屋にて供物を賣る。參詣の人を見て、米のか土のか〳〵と呼び立る。此水茶屋の娘おせんとて、美人の聞へあり諸人此娘を見んとて群集したり。爰に今は天王寺といふも、前は感應寺といふ日蓮宗也。門前に昔よりいろは茶屋とて、五六軒の娼家あり、今はさかりにして家數も增し」云々

とあるのに見ても瘡守稻荷の繁昌ぶりは想像されやう。娼家と云へば

いろは茶屋かさ森ちかく氣にかかり

といふ古川柳が殘つてゐる。

瘡守さまの御厄介になることを氣にしながらもいろは茶屋へは足繁く通つたことであらう。

こころが感應寺の西方にあつた笠森稻荷が感應寺の境內に移轉した享保以後に攝州產の大前孫兵衛といふものが芥川の笠森稻荷を白山御殿跡の自邸へ勸請し、土團子を供して治病を祈願し癒へて米の團子を供するに、奇瑞があつたので、その邸內へ多數の患者が踵を接して參詣した。

このありさまに大前孫兵衛は他聞を憚り、享和年間におのが菩提所の谷中大圓寺に移轉させたのである。

高槻城主が氏子

文和年間、南朝北面の武士眞上城主眞上虎才丸平政阿は特に笠森神社を崇敬してゐたことであり、元祿十五年閏八月一日に永井高槻城主（豊熊）から祈願成就の賀儀として金燈籠一對及び青銅二貫文を奉納されたことゝ、又寶永四年正月十四日には永井高槻城主（傳之助）の武運長久祈禱のため靈台院並びに長壽院から燈明料として白銀一百目を奉納された。

享保二年四月八日には仙洞御所から御紋章入の膳具及び金子百疋を下賜せられた。それは法王樣勅願の御事があつたためである。文化二年の頃高槻城主の永井日向守は氏神として崇拜されてゐた。

しかし、笠森神社がいつの頃から笠森稻荷社と呼ばれるやうになつたかと云へば元祿十四年のことで、當時宇賀御魂神を勸請合祀したためである。

現社殿は元祿十四年十二月二十七日に社家中村左兵衛尉重吉が改築擴張したもので隨分と古び、ところ〴〵に修復の痕跡がある。

社殿の棟上最中、遙か向ふの街道を赤穗義士仇討の早打駕が通過したと云ひ傳へられてゐる。

芥川で子が出來る

民族學研究家として知られてゐる畏友澤田四郎作博士は「變態心理」（第十三卷第三號）へ「附會的性神の信仰」を發表された其の一節に、

「……この笠森稻荷は、有名な下の病の神となつてゐるので毎年舊曆七月の十四日から四日間行はれる祭禮には、子供の得たい石女は、その晩河原（芥川）で腰をまくつて石の上に座つてゐれば子供が得られるといふので、澤山そうした婦人を見かけるといふ話である。

社家中村家では代々尊族が隱居して祭祀を奉仕して來たが中村兵部資重の代になつて隱居後に生れた嫡孫に宮守を傳へることになり、現在は大阪府三島郡春日尋常小學校長をしてゐられる中村勇氏が宮守をされてゐる。

↓笠森稻荷社

この話は筆者澤田博士も直接見かけられたのでないことはこの話を杜氏某から聞いたやうに書いてゐられるのでも明らかであるが、この事を中村勇氏にただすことをうつかりした。尤も夏に祭禮があることは話されてゐた。（つゞく）

懸賞 誌友倍加運動

＝抽籤期日延期＝

本誌は聖戰下の趣味陣營にあつて素晴らしい發展を續けつゝある本誌は左記規定により誌友の懸賞倍加運動を開始してゐます。

新誌友應募規定

☆誌友たるの資格は「川柳雜誌」一ケ年分三圓六十錢を前金にてお拂ひ込みの方に限ります

☆誌友を一名御紹介下すつた方には抽籤券を一枚、二人御紹介下すつた方には二枚、以上これに順じて抽籤券を差上げます。

☆誌友希望の方は自己推薦として一ケ年分前金にてお申込み下さい。

☆誌代のお拂込みは小爲替又は振替口座大阪七五〇五〇番を御利用下さい。そして小爲替の方は紹介者名及び誌友名を御明記のこと、振替の方は通信文欄に紹介者名及び誌友名を御明記下さい。

☆抽籤を四月三日の神武天皇祭まで延期いたしました。奮つて御參加御援助下さるやう願上げます。

（發表は昭和十五年五月號）

賞品

一等　桐箱入川柳掛軸（麻生路郎揮毫）一幅　一名

二等　川柳横額（同）一枚宛　二名

三等　川柳短册（同）一葉宛三十名

四等　投句用箋一册宛殘り全部

大阪市西區江戸堀上通三丁目四六　昭和ビル

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇

近作柳樽

麻生路郎選

腰辨でない有難さ吹雪する　朝鮮　高原惡源太
丙種なり慰問袋をたんこだそ　同
智慧よりももつといゝのを貸してくれ　同
一廻り大きい金庫買ふ話　同
結び目の多い小包母から來　同
べらぼうにお天氣がいい大晦日　同
デップリと肥つて暮に損をする　同
不足顏だがいらぬとは云はぬなり　同
聞き上手大分頭がはげあがり　同
笑ひ聲にも持つ奴と持たぬ奴　同
進級をして補充兵角がとれ　南支　酒井美知夫
糸垂れて敵はごこまで迫るやら　同
鹵獲品今度は敵の方を向き　同
稻光り敵も味方も浮出され　同
濡れて居る煙草が淋し小休止　同
砲聲も味方の分は氣味がよし　同
うたゝ寢の顏の新聞借り手あり　同
敵はまだ逸し木影の風を戀ひ　同
お祖父ちやんの子お父ちやんの子と智慧がつき　大阪府　西尾　棄
二階借こゝへ手拭かけましよか　同
父よあなたは運かつたと迎へられ　同
朝の床ピンはバラ〳〵落ちるもの　同
値切つてるは妻の聲なり日曜日　同
子のくれたせんべい無理にたべさゝれ　同
旅枕土産の笛をソッとふく　同
浪曲が趣味とは新妻チト淋し　同
看板屋點を忘れて又梯子　松山　山本耕一路
看板屋儲かりそうな風になり　同
エスサマ、エスサマと書いてひとり悦つちや少女　同
屋根・屋根・屋根・三角定規の亂列　同
色づかぬ藝をせない樹知らない樹　同
春の海今日もひねもす催眠歌　同
蟻の目に長靴黑く聳へ立ち　同
輕便ののろさへつゞくはぜ紅葉　松山　山岡　漫步
戰勝に醉ふべからずの美談佳話　同
案山子かと思へば稻を刈りはじめ　同
轉住の當座ボストへよく通ひ　同
翁から來た盃へ座り替へ　同
兵古帶も心もゆるむ暖かさ　同
助產婦はお醫者の型で手を洗ひ　同
阿部中將戰死
大行の山嶮なるが悲しけれ　海拉爾　小川靜觀堂
長城は日本男子の死ぬ所　同
其後のノモンハン
草原がもこの草原にかへりけり　同
支那中央政權
月滿ちて生まれ出ぬ惱み　同
麥二割仰山そうに言ふ勿れ　同
國境の町よ夕陽が暮れ急ぐ　同
大晦日のろい電車に搖られてる　廣島　石原　伯峯
狂人のこゝろにも似て灯をあさり　同
ニヒリスト冷えきつた瞳で壁見てた　同
泥棒の心理にふれてうそ寒し　同
名士夫人榮養不良じみた顏　同
親孝行少しは嘘のある手紙　同
因緣の怖さへ寒う寺を出る　大阪　米谷松太樓

云ひたい事を云ふページ（其の二）

東西南北

森半壘

元旦東西南北を拜むので四方拜だが、その方位を佛教では西方は十萬億土を指すので東南北西、麻雀では春夏秋冬に充てゝ東南西北の順となる忠臣藏七段目の「花に遊ばば祇園あたりの色擧へ、東方南方北方西方彌陀の淨土……」『辰巳婦言』の「東妓南品北廓西娼」『鎌倉三代記』の「東の陽氣は是雞鳴、南北西に人氣」等は前者の『日本振袖始』の「東南西北四面四維……」『初春厄拂』の「東南に雲起して西北に風靜ならず」『芭蕉翁終焉記』の「東南西北に招かれて……」等は後者の例である。

★

大阪　正本水客

正月は寒い程正月らしい。寒さと云へば人間の密度がふえる程、都會溫度と云つて氣溫が上昇することを何かで讀んだが、そう云へば北極や南極は寒いのも無理はない。

旅戻り

大連　佐々木三福

早くから日本を飛び出し、青年期を全く支那で過した私は、ゆつくりと母國に接する機會が無かつた、處が今年は遇然の機會から永い間の望が達せられる事となり、一ヶ月に亘つてゆつくりと次の樣な都市を巡つた、十月末日門司に上陸し、廣島、鳥取、福井、直江津、長野、東京、宇治山田、和歌山、大阪、福岡、鹿兒島と相當永い旅行になつた到る處で黃金色の稻が刈られてゐた。枝もたはゝに柿が實つてゐた。永い〳〵汽車の旅も窓外の秋色は眺めても眺めても觀あかぬものであつた。この內伊勢から熊野路の旅行記は別稿にして發表する事にした。溫泉地も多く訪ねた。伊豆伊東、福井の芦原、鳥取の三朝熊野路では勝浦、湯の峰、白濱等流石に日本は火山國だ。好物のふぐも味つた、大阪の酒も忘れられぬものであつた。あれも之もと書き上ると限りが無い。

東京では柳樽寺同人から招かれて句宴に臨んだ、お達者な信子夫人にもお會ひし、帆吉、臥龍洞兄等の元氣な柳論を拜聽した、大阪では不圖も舍弟の急病に出くはし、路郎先生の御世話で帝大の布施博士の來診を得た。そして生命拾ひをした。弟の生命は川柳のお蔭で助かつたのだと兩先生に心から感謝をして居る。

（一四、一二、一一）

時代の投影

石崎柳石

「麥飯で鍛へ直して娑をとり」と云ふ古句があるが、現時は聖戰の只中、明朗アジヤの建

らくに削れて書きよい
トモエ鉛筆
大阪　株式会社　黑松勇藏商店

戰友の無口は月を見てゐたり　同
義理堅う住んで都會の隅にゐる　同
筆まめに銃後は負けてゐる姿　同
慰問文商店法の灯が消える　同

聖書五句

よりごりの中にバイブルまじつてゐ　大阪　笠原路生
蛇が出てから創生記面白し　同
バイブルを讀む嫂の不仕合　同
俺の伯父パリサイ人に似て貸さず　同
外交員聖書を讀んだこともあり　同
熟練工妻に電髪させてみる　名古屋　清見松夢
事務服を着てる社長の家族主義　同
親類を當てにしてゐた莫迦と知り　同
白い手で炭屋は有りませんと云ふ　同
同族會社黑字になつて訴訟事　同

ポーランド解消
一擊でぺしやんこになる强情さ　大阪　丸島利生
イギリスの苦惱
老大家あの手この手を使ひ果て　同
重慶の昨今
そろ〳〵と秋風がたつ屋台骨　同
アメリカ人
お隣の喧嘩氣になる有閑さ　同
フランスの老衰
尻馬に乘らねば云へぬ萎びよう　同

留守ですことわるとこへかへつて來　大阪　寺尾破衣
若旦那映畫觀賞會幹事　同
親からの手紙で女中金を借り　同
二日醉妻に帽子をたづねられ　同
除隊して和服でうかと擧手の禮　同
三人も産めば女房押しが利き　下關　櫻川不水
釘一つ打たず大家の奧に居る　同
帝劇で會へば光つちやんアイドントノー　同
大根を一本下げて物價論　同
三人が寄ればふぐなこつ、こうや　同
總督は領主になつた口をきゝ　朝鮮　村野東狂子
小國の逃げもならずにすくんでる　同
死なせ度くない母親の忠義論　同
資本家の向ふを張つて風寒し　同

しめつぽい話になつて炭をつぎ　同
神樣を北支の空で見たと言ふ　廣島縣竹原町　西野みづほ
十二月アレグロになる人の足　同
流行は釦減したり殖やしたり　同
蔭膳の湯氣は武運を示す樣　同
叔父さんに聞いて見るはと女云ふ　松山　芝田靈子
敗け角力もんどり打つて戻つて來　同
足袋をはきながらも女鏡に居　同
下積の俺が手と足ばたつかす　同
別室もやはり女の連がある　同
話すのが厭な人への毛絲針　愛媛縣大洲町　米澤曉明
停電へ神棚の灯の有難さ　同
紙芝居明日立つ辻を考へる　同
何番といふ弔電を打つただけ　石川縣小松町　勝山しとし
將校の屯の如く薄の穗　同
壇の浦陽はかん〳〵と鹽が出來　同
生字引といはれくすぐつたく答へ　同
噛みしめて京の言葉の刺に觸れ　大阪府高石町　米本貴志子
名譽慾鐚錢一つ無駄にせず　同
老朽の今日も辨當ぶじに食ひ　同
あの鼻が廢娼論をとなへさせ　同

日系市民
排日へ日系縣議嚴と居る　ホノルル　前山北海
レイ賣れてけふの糧ありボイと鮭　同
政治慾縣人會を弄び　同
珈琲を一杯飲んで見合濟み　同
おとなへば百十二翁掃いてゐる　名古屋　鈴木可香
金と地位出來て消極的な智慧　同
林間學園思ひ〳〵の方を向き　同
猛吹雪さぼれ〳〵と降りしきる　同

車中雜感
青い海これから別荘にさへぎられ　廣島　大森風來子
腕白な子がゐて母の詫上手　同
ハイヒールへ追ひつけなかつた十二月　同
日の丸を手に祝盃へ遲れて來　同
局長と言はれる方が禿て居ず　大阪　田中風葉
肩章の上で霰が消えてゐる　同
銀狐賽錢箱の上へ置き　同
蔭膳へ歸還の近い便り置き　同

設の爲め、五族協和の樂土實現のため、上下麥飯で鍛へ直して行かねばならぬ時だ。琺時の經濟戰に當り、國策上よりも白米食廢止と麥飯の奬勵が提唱されて居るのだから、尙さらである。で、最近或女學校で晝食の折、一級で之を調べた所、自宅で麥飯常用の者五十名中に三分の二程ありだが持參の辨當は皆白米であつた。

この點鍛へ直すのは女性からも必要である。麥飯できたへ直した嫁が先づ肝要だ。

★

鳥山一歩

記念すべき紀元二六〇〇年を迎ふるにあたり、**一歩五十一歳**を踏み出さんとす。それ人生五十・・・・・・功無きを愧づの年はいま過ぎたり。眞にこれより若返りて**數步**を進むべしとなん。

若返る道見つけたりあれ日の出

儲からぬは仲居と酒屋

長崎柳秀

毎年正月二日は知己のかたを初め藥理學教室出身者ならびに現教室員かた〴〵の年賀を受けるならはしになつて居ります、大抵朝の十時頃からそろ〳〵御客さまが御越しになり夜分に迄及ぶのであります。所が私一人では到底應接し仕切れないものですから、當日は馴染の仲居〇〇さんに來ていただき加勢も亦應援もして貰うて居りましたが、支那事變このかた御近所の手前出征勇士の御苦心などを顧みて、話し合ひの末新年の此の慣例を廢することに致しました。

是れで家内の氣苦勞殊に御馳走の心配や女中どもの忙しさなどは無くなり、まことに静かなゆつたりとしたお正月にかはりましたが然し何處か物足らぬ春らしくない春になりまして、幾分淋しいやうな氣分がせぬでもありません。尤も私共の宅はそれでよろしいが、この急激な變化でひどく痛手を受けたは取りわけ仲居の〇〇さんと酒屋かと同情致して居ります。

公定價格

小山文三

物が足らぬから買溜めしたくなる、賣れ過ぎるから賣り惜しむのだ。茲に價格公定が生れるのも攝理である。だのにもつと高値の闇取引が有るなんテ、そんな氣樂な金持が有るのかナア

師走川柳大會て

高橋かほる

五客の賞品を三ッ貰ひ、意氣揚々と歸ると住吉公園のグ

―御入院は
需めに應ず―

醫學博士　谷内與一郎

谷内小兒科病院

大阪市港區市岡元町一丁目（電車道）
電話西四四八一　八〇三七番

情實に負けぬ男は左遷され　大阪　富岡　巨人
曳かれ行く石炭船におしめ干す　同
責任がござのこうのと役所なり　同
親切にされて迷惑とも言へず　同

政務總監閣下迎祝

迎送の練習臨時の閣下なり　朝鮮　姜　弘龍
落ちた餅ほこりがつかぬまで掃けり　同
ソガリ魚の名譽閣下が召しあがる　同
勞奉へ別莊は顏も出さず住む　同
歌一首師の面影の過去にふれ　兵庫縣　森本　秋子
受付の窓を出征旗が通る　同
悲しみは花つめばとて摘ばとて　同
生け花へ妹も居る年の暮　同
九錢になつてもバット手に入らず　大阪　岩崎　水虹
ボスターの雪北風の驛を出る　同
ごぶ鼠今日から七分搗きを喰べ　同
複々線追ひ越す顏が羨まれ　同
初空に一本杉の雄大さ　尼崎　山田南濃路

戰地の友の便りから

便衣隊身振り言ひ振りみな憎し　同
鐵に指吸ひ付く零下三十度　同
生活が豊かになれば家欲しく　大阪　淺野　杢介
大陸へ行く女なりよく語る　同
子心を思ひ少しの餅もつく　同
物資不足金の値打はなかりけり　大阪　松枝　靜波
資源愛護ズボンのつぎを憚らず　同

勅題

迎年世祈親子七人皆達者　同
氣象ねなら一本提げて來いと云ふ　奈良縣　鵤田町　嶋田　翠峯
身に覺へないと云はさぬラブレター　同
その中で垢ぬけしてる妾の子　同
初雪が長屋の國旗に降つて來る　大阪　山本　葉光
電髪の型で大菊かれ殘り　同
無禮講になつて脚氣のはれを見せ　同

年迎世祈

年かへて氏神さまへ祈る今朝　中西　彌生

三千年の春に祈らん宇治山田　同
初風呂わいたわいたもきかれまい　同
ござ椅子に掛けて見たとて小僧さん　松本　小宮山雅登
誰れを呼ぶのか北風に窓を開け　同
慰問文信濃の鄕に雪ふる日　同
團體が四方に散つた馬の尻　京都　福田　丁路
表情の冷たき巫女の麗はしく　同
マドロスの髪の白さを親しまれ　同
國策に生地がものをいふ親讓り　高知　岩原　風味
僕は未だ童貞ですと丙手　同
如何しても牧師になるといつたつけ　同
灰色へとけ込むやうに立つ男　大阪　竹中　顯
少年一人ましろき戀に醉はんとす　同
晝の夢きたない色もついてゐず　同
戰地から歸り無口の人となり　朝鮮　弘津　柳慶
先生にも儚い戀がありました　同
拍子拔したように除隊する　同
禿でもあるのか婦人帽の被りやう　大阪　尾崎　方正
眞横から見る口髭はもの淋し　同
盛り場へ布團の柄を着る若さ　同
愛のひゞきよ不協和音と亂るゝな　堺　麻生アート
未亡人時計の音に似た生活　同
佛壇の新らしき艶亦悲し　同
謙讓が度を過ぎおんな嫌はれる　岡山　鈴木　九波
想ひ出す故鄕の土は臭かつた　同
新聞に載らぬ一生終つたり　同
計畫の一つも成らず十二月　京都　野口　柳太
妻と出てショウウインドへくたびれる　同
桃割れがアンミツ三ツ前に置き　大阪　平川　久枝
遠慮なく石炭燃える十二月　同
石炭も焚けず積んでる寒い舟　大阪　吉田　凡太
勘違いされて妾宅寢付かれず　同
留守宅を訪へば夜業の灯で迎へ　大阪　中原　銑人
戰友も眠れぬか煙草吸ひつゞけ　同
代用品なりに戰時の子は育ち　愛媛縣　大洲町　澤田　異天樓

入試は內申

ランドで走り合に一等で鉛筆二本とキヤラメル一ト箱を賞品に貰つた長男考太郎曰「何んや五等？チエツ一等取つて來なあかん〳〵〳〵」

子供には勝てません、大會の賞品貰ひ出しにいろ〳〵御盡力下さいました夕鐘はんおゝきに

鰛の北鮮

三鴨　美笑

北鮮は鰛の景氣で金に羽が生えて飛んで居る物價の高いことも日本一、誰れに聞いても嘘でない。川柳人も景氣がいい、私も結婚後六年目に子供が產れ目出度と酒の新春が溢れてる

初產と初日へ酒の樽の山

犬

岩橋　双虎

節米が唱導されてゐるのを外に小犬を養いムッと名付けて可愛がつてゐる外出が少し遲くなつてもヒステリックな聲を聞かなくなる。犬の事で食膳が賑かになる。子供の無い家庭に奬める犬を飼ひ給へ

★

矢野虻の磨

光輝ある二千六百年の初春をお祝ひ申し上げます。

變てすねえ

丸尾　潮花

一笑、紅多呂と續けて呼んで見ると何だかお酒でも呑めそうに思へる。

又私の雅號を口早に續けて呼ばれると變にそそつかしく聞える。

リスと云ふニックまで戴いた時代も有つたのだから無理もないがまだ賣物ですからねえ

クハコナリ

米澤　曉明

センリウハジ　メテヤット
ゴネンメノハルコダ　カラ
ニメグマレヌボクセメテセン
リウガ　ワガコデアルト
イフツモリデ　サツクスコノ
ハ、ニナルコトモ六ケシイガ
クノオヤニナル　コトモシ
ナンナリ
ダイイチジ　ブンガヨ
イハハニナツテキルカイナカ
ガ　ハンセイシレウダゲ
フメイ

★

黑川　紫香

正月の船旅なんてするものぢやないですね。とりわけ三等の雜魚寢はね……

寢相の惡い隣りの人にいやと云ふ程擲られたのが今だに忘れられません

鷄卵饅頭

今治　長野　文庫

普通今治の名物と云はれて居るのは「鷄卵饅頭」で、これを市內でも、驛頭でも、波止場でも「今治名物」だと云つて賣つて居るが、この名前はその品物にピッタリと來ない、大體この名前からうける感じは何處かの名產「鶴の卵」のやうに鶴卵大の饅頭だと誰しも思ふだらうが、實物は想像外で鶴卵饅頭そのものは小つぶけな平凡なありふれた小饅頭で、大きさは梅の實位だ。僕が若し名を附けるんだつたら「豆饅頭」か「粒饅頭」位に名付け度いと思ふ、僕はこの饅頭よりもむしろ「カマボコ」の方を今治名產として誇り度い恐らくカマボコを知らぬ人はあるまいが、カマボコと云ふ奴は夏より冬、殊に新正月から看正月にかけて、殊に風味がある（嘘だと思つたら試みて見給へ）

うちの子は鐵運强いと親心　同
病める兒がコミック欄へ白く笑み　ホノルル 古川　風竹
十二月氣の持ちやうで苦にならず　同
靴拔ぎの石が客筋見分けたり　堺 野島　神樂
落ちて行く支那にも金が要るの也　同
皈順匪の圖々しくもアクビする　北支 吉田　燧洋
城門に立つ巡警へひるの月　同
夕飯がチブス饅頭に採めてゐる　大阪 藤森小雅子
電髪のうしろ姿の恐しさ　同
薄情の手相思案に突き當り　高松 禰宮　白鷗
冗談へ默つた女の齒磨粉　同
端書一枚もうそんなには書けません　廣島縣竹原町 黒本　芳泉
廻りくどくお客を取れと云ふ女將　同
買物へ母と出て行く下駄をはき　廣島 立花ひろ子
突然は友に嫁入先が出來　同
店仕舞算盤一つ陰氣なり　東京 田中　宵風
金齒ちと見せて白髮の助産婦來　同
火花火花文學論をふつとばし　愛媛縣角野町 在間　小樓
本人はさほどでもない嫁きおくれ　同
御世辭では人後に落ちぬ散髮屋　愛媛縣大洲町 日柳　一葉
小說の世間もせまし又出合ひ　同
茶が好きな子供がませた事を云ふ　西宮 阿萬　萬的
小器用な男が職を亦變へた　同
女房の聲が聞える湯につかり　大阪 並木　南風

女醫專の帽子は横にとまつて居　同
父親の頑固へ娘美しい　京都 大平　幸路
うらむ事なし無力の腕細し　同
一本のマッチを女給無駄にした　大阪 爽　一笑
きんかんの袋を買うた初芝居　同
緣談のみくじ何度も引きなほし　長野縣上山田 佐二木千隈
ヤケ酒の酒屋と醫者に借が出來　同
虫喰つた栗も値段のうちであり　大連 松井物數寄
松茸へ値段を先に聞かされる　同
大陸の落日軍馬嘶けり　朝鮮 崔　宗錫
商人の威勢に買手なかされる　同
鐵兜せな一パイの陽の光り　北支 鈴木　默人
いらだちへ呆けた樣な駱駝の目　同
知つてるよなどとラヂオでしつた知慧　名古屋 長谷川長樂
榮轉はいつも白紙で赴任する　大牟田 高田　抱逸
ほつ〳〵と云うて商賣儲けてる　大阪 山川　富士
綺麗だなあと思ふ陳列十二月　下關 多田市多樓
鯛の鯛でもう一本をつけさす氣　尼崎 江口　正路
バスガール一家ささへる朝を出て　奈良縣櫻井町 吉田　湊万
嫌曳へ殘酷だつた悔があり　廣島縣竹原町 杉原　愛鳩
インキ壺頓首と書いて蓋を覆ひ　下關 中村九呂平
恩給の如露へ冬の陽が沈む　大阪 津路紅多呂
なはばりをくゞつて方面委員來る　尼崎 奧田　綠水
三男も勇躍征途波高し　大阪 坂井　楠水
聽き役に座らされてる年を知り　ホノルル 三輪　晩翠

新春川柳句會

皇紀二千六百年の輝かしい新春句筵を大寶寺町の誓得寺で開催いたします本年も相變らず精進のほどを切望いたします　初心の方々も萬障繰合せ出席下さい

★

★日時　一月九日夜六時（火）
★會場　誓得寺（電話南四八八六）
　　　市電淸水町電停一丁北ノ辻西入
★兼題　「戎さん」（三句）……麻生路郎選
　　　「スキー」（三句）……岡田某人選
★講評（前月句會の句中より）……水谷鮎美
★柳話　雜感……麻生路郎
★會費　三〇錢（川協章提示の方は二五錢）
★呈賞　兼題　天位に不朽洞會員の短册
　　　席題　天位（各題）に粗品を贈る
幹事・潮花・斗風・紫香・孤篷・里十九
大阪市西區江戸堀上通二ノ四六（昭和ビル）
主催　川柳雜誌社
電土佐堀三三三三・八一六三・八一六四番

初春の夢

酒井　斗風

過去の川柳生活に、爪跡も殘さなかつた私の夢は、早くお金持ちに成つて、全國に、川柳會舘を建てゝ其の地方へ旅行された川柳人に、自由に使用して頂き度い事ですが。よいごしの金は使はない私ですから、お金持に成る事は不可能です。だがお酒の方は川柳と共に鮎美師匠の直傳ですから、今年は去年病氣の爲、呑めなんだ分までうんとガンバリます。

君と僕

大西　八歩

世の中がお互ひのものである以上君と僕はあく迄も良心的に手を組んで行きたい。心と心にふれ合ふ何物かゞあつて欲しい。或る時は意見の相違もあろう。立場の違ふ物足りなさもあろう。又それらからくる疑惑がともすれば兩者の間を隔離させようとする。然しそれは大都市の持つ複雜性がお互ひの心の月を覆ふのだ。私達は高層な建築物に眩惑されてはならない。華美な非人情的な服裝に惑はされてはいけない。伸びる都會の全貌は生駒の山頂から常に俯瞰する氣持でゐたい。甍の波が石切さんの手前迄押し寄せて來てもパノラマ製作者の立場で批判したい。高さを競ふビルの壁は悠久の雲の流れをせき止めるのには役立たないのだから。世の支配者は物の姿ではなくて人の心であると云ふ不變不動の眞理を持ちつゞけて行きたいものだ。それが結局お互ひの世の中を樂しいものにするからだ。

君と僕は永久に心からなる君と僕で進みたい。

（十四、十二、八）

★

東京　淺田　右聞

舊臘法醫學會で京城に出かける。慶州や金剛山の案内、妓生の接待、大滿足で歸る。
急峻は歩かせる金剛山のかご
じよら組んで股に手入れる最敬禮
チツプ次第ペットの買へる二番船

神武さん

田邊　由布

〇月〇日、家族を伴つて聖地めぐりをしました。
まづ橿原神宮に參拜し建國の古をしのび、興亞聖戰下の國運の隆盛を祈願して、それから神武天皇、綏靖天皇、安寧天皇、懿德天皇の御陵を巡拜しましたが、村人に道を問へば、「ア、神武さんか」「ハア綏靖さん」「安寧さんは」「懿德さんは」と、いとも氣易く「何々さん」で聖地の人らしく、大和ことばも親切に教へて呉れました。
神武さん問うてなつかし村の人

Sata Special Klinik
診療　毎日午前
呼吸器病科
醫學博士　佐多愛彦　電北88
醫學博士　加藤謙一
醫學博士　螺良（ツブラ）四郎　電尼崎1151
内科
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町　電北八二八四

武玉川四編研究（二）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(26) **降通される下駄の開帳**

省二＝開帳が始まつた頃から降り續く。まるで下駄の開帳の様な光景の開帳。

秋の屋＝下駄の開帳の様だと云ふのではなく、晴天ならば草履や雪踏で參詣するが、雨天續きであるから、誰も〳〵下駄でくる、と云ふ意であると思ふ。

東魚＝お説通りである。蛭子氏も同説らしいが、一寸下駄を拜みに來たやうだととれる。

省二＝下駄その物の開帳では、駄洒落となつてしまう恐れがある。

(27) **繩目の恥は狸なれとも**

省二＝人間なれば、繩をかけられるのは當然恥だ。然し、狸に於てもだ。狸は八化といふのに。

秋の屋＝狸なれども恥は恥だ。と云ふのである。狸が人を魅かして、繩を懸けたと云ふの歟。

東魚＝人間は元よりの事だが、狸だとて繩をかけられるのは恥な事だといふ諧謔である。化けたり化かしたりする奴のくせに、その心持ちが陰にあるとみてよからう。

(28) **先腹の子か獨精進**

省二＝こんな風になりたがる家庭事情は倶に不幸せ。「獨り」で句を成す。

秋の屋＝複雜な事情を、十四文字に詠んだのは、大いに賞すべきである。

東魚＝人知れず精進して居る趣がみえて哀れである。

(29) **聲を直して戻る風呂吹**

省二＝風呂吹を馳走になり、寒さにふるへた聲を直して戻る。寒むい時には溫い食べ物に限る。風呂吹は最も良し。

秋の屋＝顫へ聲を直すとは少し可笑しい、とは云へど正解もない。

東魚＝當り前の聲らしい聲も出せぬ寒さを、風呂吹に溫つて、やつと普通の聲が出せる様になつて、家へ戻る。(フウ寒い〳〵などゝいふ時は、暢び〳〵した聲は出せない)

(30) **利た〳〵とにるあまゑ**

省二＝一天かき曇り雨となつた嬉しさ。につて迄利いた〳〵に、十分現はされる。

秋の屋＝雷ごろ〳〵電びか〳〵。桑原々々

東魚＝飄逸なところがある。「利た〳〵」が洒落てゐる。

(31) **四十二に太子の顏のまた碇**

省二＝聖德太子の句かと思ふが——厄年になり玉ふても童顏であらせられるといふのか？。

秋の屋＝此の太子の御像を見ると、多くは童顏であつて、大人らしいのは拙いやうである。聖德太子は御壽四十九だといふから、他の太子かも知れぬ。

東魚＝太子のもうし子なのではないか。それが四十二の厄年に至つても、其童顏が失せぬ處があるとでも云ふのかと思ふ。

(32) **妾か死ンて鶯も死ぬ**

省二＝お妾の慰みに飼つてゐた鶯だからその死後は他の者が面倒がつて餘りとり合はぬので。

秋の屋＝法々華經を讀誦して、兩者の後を弔ふが宜い。

東魚＝妾の生活が思はれる。

(33) **蛸くらけ俵藤太に膝をくみ**

省二＝藤原秀卿が龍宮の客となり、大百足を射殺す俗話。「藤太様御入と海月門をあけ」蛸、海月其他藤太と仲間交際。

秋の屋＝膝を組むといふのは、膝組談判などといつて、他人と談合する場合をいふ語であるが、この三者が何を談合するの歟。蜈蚣を討伐する相談とでも云ふの歟。

東魚＝膝を組みは親しく同席する方の意で、藤太は蛸、海月などゝ知り合ひの仲だと云ふ可笑味。

(34) **泊はしめの分ンな夕ぐれ**

省二＝泊初めの夕暮は相應に心淋しく感ぜらる。

秋の屋＝旅行第一日の夕暮といふのか。意餘つて詞足らずといふべき句である。

東魚＝「分ンな」は身分相應なの意。初めての泊りで愼んでゐる——段々日を重ねると脫線などもする。

(35) **後生願ひも生て居たかる**

省二＝極樂へゆきたいと後生願に餘念ないが、實は長が生きもしたい。死んで花見は出來ぬ。

秋の屋＝極樂は杉葉立てたる又六が門で、此婆婆に優る安養淨土はない。

東魚＝後生も安樂も願ふし、さりとて死に度くもなしと云ふのである。

(36) **樽酒になれは蛙の還さかり**

省二＝?。藏から酒が樽入になつて出る時分には、蛙の聲も聞えなくなる時分。

秋の屋＝清酒の釀造場は、市中に遠い郊外にあつて、蛙の聲も聞えたが、新酒を樽詰にして、市中に賣出す時分には、蛙の聲も聞えなくなる、と云ふのであると思ふ。

東魚＝樽酒とは德利で買ふ酒に對してゞあると思ふ。德利でチビ〳〵買つてゐた貧な時分は、都離れた佗住みであつたが、自家へ樽を据える身分になつては、繁華な住居であると云ふ意かと思ふ。

省二＝樽酒なる語をよんだ句、「樽酒であるのに內儀出す氣なし」(樽廿二ヘン)

(37) **娶も田植のよい思ひきり**

省二＝役立つ嫁だ。土にまみれて田植の手傳。「取あてた嫁田植まで上手なり」(古句)

秋の屋＝人妻となつては、蛭をこはがつても居られぬ。

東魚＝必ず姑のお氣にも入らう。

(38) **小刀鍛冶のくちか利過**

省二＝小刀鍛冶のくせに、巳の作は三條小鍛冶以上に切れるなどゝふく。

秋の屋＝辭多きは品拙しで、言はぬは言ふに優る。

東魚＝一ッぱしな事を云ふ處が笑止千萬

(39) **惚られて居る腎女の罔兩**

省二＝腎女であらうが、唖者であらうが、影法師なら惚られもしよう。此腎女一寸スタイルは良かつたのであらう。

秋の屋＝影法師が好い上に、其聲が好かつたならば、一層惚られるであらう。

東魚＝腎女だが、姿はおつだ、影法師は惡くないと云ふ、少し作り過ぎであるやうに思ふ。

(40) **茶椀て呑も女一疋**

省二＝茶椀で呑む程の女なら、女一匹といふ價値はある。男まさり。

秋の屋＝氣負肌の者の妻で、他より姐御と呼ばれる程の女である。

東魚＝男一疋といふ言葉に對して、女一疋がヤマである。

(41) **大文字樒の色の付はしめ**

省二＝大文字は山城國如意ケ嶽をいふ。七月十六日山腹に大の字形の火を點ず。感じを咏むだ句。

秋の屋＝火光が樹木の梢に映つたならば、紅葉の色とも見えるであらう。

東　魚＝燃ゆる大文字に對して、秋の漸く深くなるを感じる心持ち。

（42）　**きん玉に寢てあたゝかな朝**

省　二＝？金玉は金玉火鉢か。股火で寢るといふのはおかしい。炬燵の土製小型物を金玉炬燵とでも稱して呉れゝば判るが。

秋の屋＝金玉炬燵といふものは、甞て見聞した事がない。行火の中には、金玉火鉢を入れることが有る。此句も夫れではない歟。

東　魚＝解しかねる。きん玉を八疊の座敷の洒落とみれば、獨では寒い八疊敷も、獨でのび〳〵と寢た暖な朝である事よと云ふ意かと思ふ。

（43）　**仲人のあつたら口へ風を引**

省　二＝「口に風を引かす」（諺）。仲人口で大に話込むだものゝ、結局喋り損に終つた。

秋の屋＝蘇秦張儀も退却々々。

東　魚＝四百づゝの嘘を云つても、纏らねば仲人たるもの、聊か器量が悪い。

（44）　**言はて尺京の餘波のけふ計**

省　二＝心の中で、京へ名殘を惜しむ情。（なにか踏んで居るらしいが。）

秋の屋＝古歌の語を採つたのであると思ふが、今それを思ひ出せぬ。

東　魚＝辭句は綺麗であるが、單にこの句だけでは平凡である。

（45）　**立田姫佐保姫よりも慾がなし**

省　二＝佐保姫は春、立田姫は秋を當る神春秋の對照。秋は寂しい。しむみりとする。慾がなしである。

秋の屋＝立田姫よりも佐保姫の方が、何となく陽氣であつて、和歌などにも、此方が多く詠まれてゐる。

東　魚＝同じく遊覧の季節であるが、秋の方が春より、何かなし派手でないといふ意だけであらう。

（46）　**釿遣ひを珠數て見て居**

省　二＝寺普請。住職が手斧を遣つて居る大工の作業をみて、進捗を樂しむ。――こんな句がある。「材木買に智識逗留」（武4）。「大僧正も材木を問」（武2）。「今度の和尚大工半分」（武6）

秋の屋＝大家の隱居ではなからう歟。寺院の住職とも解釋されること勿論である。

東　魚＝隱居といふ解は面白い。前句によれば何れかゞ分りさうに思ふ。

（47）　**北條九代永い御利生**

省　二＝「鰹賣北條九代出入けり」（武10）。北條も九代も續いたのは、佛の冥加、御利生である。

秋の屋＝江島の辨財天の加護を云ふのであらう。

東　魚＝代々佛法歸回であつたのではないか。

（48）　**請狀が濟とくつすり着かへさせ**

省　二＝奉公人（下女、下男、妾其他）の身元保證引受書を請狀といひ、仲介者は口錢をとつた。引受がすむだので、着物をみんな着替させたのだ。「請狀がすむと買ひたいもの許り」

秋の屋＝「ぐつすり」といふ語が、この場合に不適當であると思ふ。女の奉公人に相違ない。

東　魚＝ぐつすり寢たなど云ふから、十分足りる意で、要するに完全に着かへさせたとであらう。

（49）　**朝食を母の後ロへ喰に出ル**

省　二＝息子の朝歸り。親父さんがけむいので。

秋の屋＝この息子まだ殊勝な處である。

東　魚＝柳樽にもある句。喰に出ルの「出ル」が巧い表現である。

省　二＝柳樽初へン

（50）　**正直過て紙子着せられ**

省　二＝餘りにも正直過ぎては、巧みに世の中は渡れぬ。――然しこんな句もある。「有る程の伊達を盡して紙子かな」。紙衣ともかき紙製の衣服。（近代世事談）「元は律僧これを著す也女の手をふれずしてなすものなれば也寒氣を防く服とす」。紙子賣も來た。

秋の屋＝朋友の借金の保證人となり、夫れが爲に迷惑したのでも有る歟。

東　魚＝借金を踏み倒し得ない正直者である。

武玉川三編研究正誤表（一九〇號分）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
一六	一	一八	○	娶
一六	一	二三	○	嫁
一六	三	二五	忘れた	に
一六	三	三四	寢は	ね

武玉川四編研究正誤表（一九一號分）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
六	二	一四	恪	悋
六	二・	一八	あ	ある
六	三	三八	腕	鏡
六	四	一一	疲	瘦
六	四	二〇	家	嫁
六	四	三〇	拜	幷び
七	三	八	安意	究意
七	三	一四	眞心に對しては	眞心には
七	四	一一	左馬	左馬寮

(6)「うそをつく日にいさみある貌」が拔けた爲に一九一號に發表された(6)は(7)であり、順次繰下げ(24)が(25)となる。次に脫原稿(6)を掲げる事とした。

（6）　**うそをつく日にいさみある貌**

省　二＝巧みに嘘を云ふ事はむつかしいものだ。そこで、いさみある面持ちで運ばねばならぬ。塲合は色々考へられるが、北へ行く約束日などだと、一層いさみある顔ならん。

秋の屋＝北國進軍に相違ない。女郎が啌を云へば巳も又啌を云ふ。

東　魚＝北國行說に賛。但ついて出る嘘をちやんと立案して、日暮を待ちかまへてゐるのであらう。

あらゆる趣味のお稽古場

手はさきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達

松坂倶樂部

會員募集

お稽古種目
◇長唄◇常磐津◇清元◇小唄◇鳴物
◇箏曲◇尺八◇舞踊◇謠曲◇能樂小鼓
◇ピアノ◇聲樂◇書道◇日本畫◇茶道
◇華道◇料理◇洋裁◇俳句◇川柳
◇氣學◇棋道◇松坂レコード吹込所

川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生　擔當

御申込みは
七階　松坂倶樂部へ
電話　戎（代表）三〇〇三番

松坂屋
大阪　日本橋

★川柳は輝く★

川柳人協會主催
大阪朝日新聞社會事業團後援

第三回 同情週間 川柳大會

十二月二日午後六時
於大朝三階大廣間

川柳殿堂 大朝大廣間(上)と選者及び大會委員(下)

あゝなんと熱心な人びとの多いことよ。

開會時刻たる六時にまだ三十分もあるといふのに場内既に八分方詰つてしまひ、續々と詰めかける參會者の列が入口の受付子を面喰はせてゐる。

東京から本大會のためわざ〳〵燕で御來阪の川柳人協會名譽會員村田周魚氏が出迎への西田紳樂と共に來場、同行のきやり吟社同人山川花戀坊氏が追つかけて參會。選者控室では既に兼題の各選者が堆い投句稿を前にして選句に專念して居られる。會場は席を爭ふ人びとのざわめき、會場係の右往左往、まこゝに湧きかへるやうな有樣である。

斯くて、第三回の歲末同情週間師走川柳大會は、頭初から物凄い緊張と昂奮のうちに文字通り華々しく開かれたのである時に正六時。會場既に余席もない。

司會者水谷鮎美氏の開會の辭あり、朝日新聞社の都合によつて最初の映畵を次へ廻し直ちに席題發表、一せいに作句に移る。作句者の熱が、廣いホール一ぱいに漲る。もうこの頃からの參會者には、物置から補充の椅子を出さねば間に合はなくなつた。役員達の分はこつくに徵發されてしまつて、立往生である。そしてその補充の分も、ぐら〳〵になつたのや籐目の破けたのより無い。恐らく、このホールに、これだけの人數が集るこゝは豫想外でもあり未曾有でもあらう。椅子がそう語つてゐる。そしてこの多數の人びとの間から起る煙草の煙が一ぱいに立ち罩めて、スナップも映畵も寫り難いといふ苦情が出た程である。喫煙御遠慮ねがひますそして窓を少し開けて下さい。あゝそれでも息づまるやうなこれは雰圍氣だ。

續いて映畵、これは發表されてあつた文藝映畵を、都合により變更、朝日新聞社提供の短篇映畵を三本。子供グラフ、最近版のニュース一本。皆熱心に見入る。子供グラフの微笑ましさ、歐洲動亂ニュースの緊張。灯がつくと、もう溜息を吐くひまもない。今見た映畵を題材にして作句だ作句だ。そして席題五題一齊に締切。緊張が緩むと、會場の空氣も、今までの壓縮から、ぐんと擴がつた感じだ

川柳人協會理事長麻生路郎氏が起つて挨拶あり、直ちに兼題一部の選句發表に移る。トツプは川柳雜誌社橘本綠雨氏の「石炭」次に昭和川柳社の小川百雷氏「神樣」續いて松阪倶樂部川柳講座の川出美根子氏が「蔭膳」の發表をされる。一人々々の發表が終る度に、賞品係が大童になつて賞品を配る。拍手、朗笑ざわめき。なぎ、等、なぎ。

次は講演である。川柳人協會名譽會員堀口塊人氏が起つて「批評は親切に」の題下に、開口一番、事變後果饅頭の小さくなつたことから、物資の不自由が一面齎らす良効果を說き、即ち物の見方に二つの面があること句の批評についても同斷であつて、批評の態度如何によつて變つて來ることを語り、然らば批評は、褒めるべきであるか、けなすべきであるかに及んで本題に入り、批評はすべからく親切にして、作者をして伸びるべき所まで伸ばしてやるのが批評の使命であると結んで喝采裡に降壇。引續いて名譽會員村田周魚氏登壇作句の初步的態度としては、よくその對照の本質を摑むべきこと、定石として古今の佳句研究のゆるがせにすべからざる事、しかも、定石は定石としてその上に各自の個性を加ふべきことを說き、延いて、句の調子に及び、披講者の心得べきこと〴〵もいろ〳〵說話あり、これ又拍手鳴り止まざる裡に終る。

講演が終ると愈々席題の發表となり、滿場張切るやうな期待の耳と目を壇上に向ける。披講は「入營」選者川雜支部代表西いわを氏事故不參のため庄万よし氏、「日本刀」蠟鄕川柳社河野夜玉氏、「十二月」有恒川柳會寺井銳々氏、「受付」鶴橋川柳會梶文葉氏とスムースに進み、續いて兼題の殘りの披講に移る。滿場、次々に讀上げられる佳句名吟にあるひは微笑をもらし、朗笑を湧かせ、或はうなり、さながら醉へるもの〻如きうちに、「勘違ひ」このみ川柳會好崎申仙氏(風邪氣味のため下村四呂平氏代讀)、「餅」三越川柳會栗原空栗氏、「戰友」阪大川柳會長崎柳秀氏と各題發表を終つて、最後は例年通りの寄贈色紙類の福引となり橘本綠雨氏愛孃靜江さんの手によつて拾ひ上げられる番號札の數字に、各自手許の小片を脫み、一番違ひの殘念聲やよく似た數字に見直す笑ひにホール全體が、湧き上るやうなさんざめきに溢れ、堂々三百數十人を集めた大會も、和氣靄々裡に芽出度閉會、時に十時十五分前

戶外の寒さへ、まだ醒めやらぬ昂奮を抱いて、三々伍々會場を出た人びとの心の中は、川柳に對する愛情にふくれてゐたことであらう。その熱ばんで火照つた頬を快く撫でてゆく十時の夜風は、もうまぎれもなく冬、十二月のそれであり、街路樹の葉はもうあらかたまばらにしか街燈の中にはなかつた。

大會選者及び委員の寫眞說明
▼前列向つて右より曉童、仲仙、夜王、柳秀、路郎、周魚、万よし
美根子、葭乃、空栗▼中列鮎美、紳樂、綠雨、光路、白柳子、小松園、滿潮、四呂平、アート、朴堂かほる、里十九▼後列、水客、紫香、××、潮花、風葉、××、孤蓬、某人、丹路、白面人、頑童、夕鐘、斗風の諸氏

兼題 〃石炭〃 橋本綠雨選

(五)石炭の話がはずむ仕舞風呂 孤蓬
(五)石炭へうらみも云へぬ多仕度 よし江
(五)炭坑を出ると視察は眩しがり 柳秀
(五)ストーブに馴れず石炭燻らせ 輝翠
(五)石炭は足らぬと煙あげてゐる 雀踊子
(人)石炭を客がくべてる待合所 紫香
(地)石炭の對策もなく廻り椅子 新兒
(天)云ひ負けた方が石炭くべに立ち 八歩
(軸)曳船で粉石炭が續くなり 綠雨

兼題 〃戰友〃 長崎柳秀選

(五)我が傷を忘れ戰友巻いて呉れ 潮花
(五)戰友が血潮で立てた日章旗 絹雨子
(五)萬歳の聲を戰友足してやり 銃人
(五)大君へ一緒に死ねる戰友があり 松月
(五)戰友へ水は口からうつされる 小松園
(人)城頭の日の丸抱いて見せてやり 李介
(地)戰友を隈なく探すこの邊り 光路
(天)血達磨で戰友共に助け合ひ 照波

兼題 〃餅〃 栗原空栗選

(五)祝ひ餅さげて素面でもどつて來 一笑
(五)紅白の餅着ぶくれた老夫婦 鮎美
(五)鏡餅今年は嫁の手でかざり 喜雨子
(五)名物餅土産は冷へたのを包み 銃人
(五)はかり餅貧しい人にかぞへられ 直三洞
(人)餅を食ふ日本人の底力 村句茂
(地)妻の眼に今年も餅が小さくなり 白面人
(天)黒い餅ついて興亞の春を待ち 義人
(軸)鏡餅日本人の幸を知り 空栗

兼題 〃神様〃 小川百雷選

(五)神様へ今凱旋の手をたゝき 翠陽
(五)神様に知つてゐたゞく掌を合せ 葉光
(五)巫女のくむ神酒覺悟の腹へ泌み 潮花
(五)平凡な男神様から呼ばれ 鮎美
(五)體驗があり神様を信じ切る 凡路
(人)神様へ一人も缺けぬ子を並べ 某人
(地)神様を信じ切つてる水枕 しづ子
(天)神様の前で男の別れする 水客

兼題 〃蔭膳〃 川出美根子選

(五)蔭膳へ女としての身だしなみ 小松園
(五)蔭膳へ一番乘りの軍事便 秀峰
(五)蔭膳の窓をあければ多の山 鮎美
(五)蔭膳へ男勝りの眼がうるみ 白面人
(五)蔭膳へ誓ふ小さな膝頭 占山
(人)蔭膳がいらなくなつた便り來る 義人
(地)蔭膳へ父を知らない子も座り 滿潮
(天)蔭膳へ強く生きてる手を合せ 空栗
(軸)戰の春蔭膳へとそを酌ぎ 美根子

兼題 〃勘違ひ〃 好崎申仙選

(五)値上りのバットのつりを二錢出し 和一郎
(五)勘違ひ一座の一人青くなり 白柳子
(五)勘違ひ腕組みを解きもとの人 綠雨
(五)手間だけの損をしてゐる勘違ひ 四路平
(五)北風へ向つて歸る勘違ひ かほる
(人)勘違ひお墓へ佗びることがあり 豆秋
(地)恐ろしい心になつた勘違ひ 巨人
(天)叮嚀な辭儀は後ろに社長が居 久吾

席題 〃入營〃 庄萬よし選

(五)神前へ來て入營の子は默し 達士
(五)入營に思ひ出多いペンネーム 夕路
(五)入營わ日本男子の列となり 和風
(五)入營のまだ來ぬ日記くりかへし きよし
(五)行つて來ます後は歡呼の旗の波 輝清
(人)入營の挨拶大阪辨でなし 栞
(地)入營の一列にして受取られ 某人
(天)歐洲の地圖も入營持つて行き 水紫

席題 〃日本刀〃 河野夜王選

(五)桐火鉢退けて日本刀を見せ 無名子
(五)双こぼれに思ひ出がある日本刀 春珠
(五)まだ生きてゐるぞ日本刀をなぜ 占山
(五)日本刀拔けば眞面目な顔になり 聰夢
(五)日本刀すつくと立つた腰にあり 鋭々
(人)双零れの由來が長い日本刀 塞々
(地)ずつしりと腰の重さも日本刀 柳太
(天)日本刀女の指をふれさせず 滿潮
(軸)日本刀正義を護る時に拔く 夜王

席題 〃十二月〃 寺井鋭々選

(五)十二月男の世辭もあつてよし 水紫
(五)十二月醫者も忙しさうに言ひ 春巣
(五)十二月遮斷機へ向き合ふた顔 千代香
(五)十二月求人ビラは風にちる 喜雨子
(五)十二月練齒磨の底を押し 曉童
(人)十二月なんにも知らぬ子が泣いて 白柳子
(地)十二月恩師を訪へば呟き入りて 夕鐘
(天)靴何か踏んだと思ふ十二月 某人
(軸)十二月朝つぱらから來る屑屋 鋭々

席題 〃受付〃 梶文葉選

(五)受付の窓は內からあけてくれ 九の字
(五)不氣嫌な日の受付は顎で言ひ 占山
(五)受付けをそば屋はつーと通りすぎ 双葉
(五)言ふだけを言ふと受付横をむき はるを
(五)受付へ出した指環がまだぬくし 史朗
(人)履歷書を持ち受付で寒う待ち 凡路
(地)受付の足冷へ〳〵と客がなし 水染
(天)受付になぐさめられる不倖 木桃
(軸)受付で電報持つた母と會ひ 文葉

席題 〃映畫より作句〃 須崎豆秋選

(五)コロ〳〵と干柿に成る柿が落ち かほる
(五)飛行機を笑つて降りる時の人 萬壽於
(五)降參をした支那兵は褒められる 村句茂
(五)支那の兒の笑顔でニユース終るなり 水客
(五)惠まれて朝日ニユースに母とゐる 文久
(人)將軍の或る日は鳩に豆もやり 古夢想
(地)マツチの火いとほしみつゝ冬に耐へ 亂耽
(天)米艦隊たゞ美しい美しい 嘘川
(軸)寄書の旗が占領地になびく 豆秋

協・川

★川柳人協會主催の第三回同情週間川柳大會は別項の如く十二月二日午後六時より大朝社三階大廣間に於て川柳人三百餘の一大句筵をなし大阪朝日新聞では寫眞入三段拔見出し大々的報道記事によつて社會の注目するところとなつた。

▼右の大會により本協會から大阪朝日新聞社會事業團への寄附は百四十一圓五十錢也で昨年に比し四十七圓增、第一回に比し、七十八圓五十錢增の好成績であつた。

なほ大會費用中への御寄附は當夜會場に貼出し深謝の意を表しましたが、御寄附其他費用の詳細は後日、幹事から御報告申上げることになつてはゐるが年末年始の多忙で多少遲延をまぬがれぬと思ふので御寛容を願つておく。

▼同情週間川柳大會が逐年盛大になつたことは川柳家諸賢が川柳人協會に對する認識を層一層深められたのと、選者並びに大會委員諸氏の努力のたまものである。今後一段の御支援と御鞭撻を切望して已まない。

▲本協會名譽會員村田周魚氏は講演のため、十二月二日午後五時燕で大阪驛着、協會西田艸樂理事の出迎へをうけ、直ちに大會會場に出席。當夜は不朽洞に一泊。翌三日夕刻よりフランス茶房に同氏並びに大會へ參會の山川花戀坊氏歡迎のため川柳雜誌社の路郎、綠雨、丹路、夕鐘、かほる、某人、曉白面人、昭和川柳社童、の塊人氏集合、更に席を北大阪の富貴に移し遲ればせの三越川柳會の栗原空栗氏を加へて歡迎宴をひらく。

▼川柳人協會の會員を募る——會費半年一圓六十錢、一年參圓、(前金)會員には毎月「川柳雜誌」一部贈呈、其他の特典がある。詳細は大阪市西區江戸堀上通二ノ四六昭和ビル內川柳人協會宛問合はされたい。

第二回 支部合同新年句會

時日 壹月拾參日(土)後五時半
場所 大阪驛北口前大鐵局倶樂部
會費 金貳拾錢(各題三光に呈賞します)
兼題 「發表」「共鳴」「近所」「置手紙」「金庫」各三句以內

大鐵局支部・北大阪支部
港支部・鐵道病院支部
はざくら川柳會

同舟近詠

初明りたゞ世を祈る心澄む　松山　前田五健
一月一日嚴粛な空と旗
心豊かに元旦のカレンダー
思ひ邪なし日本刀の初拭ひ
よく話す兵隊さんは子持にて
打たすゾは投手がだます手の一つ
邪飛球へ捕手神樂の腰になり　兵庫縣御影町　長崎柳秀
一人旅なにか淋しい鏡かけ
何時見ても妻寢不足を押し隱し
あさましさ捨てられまいの化粧振り
都落ち見返る空にネオン映へ
庵丁の入れよに迷う引出菓子
むつまじさたつた二人で湯がこぼれ
お互に死後を約する鐵兜
靜はず内緣の手にむつき干す　松山　矢野虻の塵
内緣と言ふ洗濯の手が白し
平靜をよそはん顏へ百ワット
元の顏に成つて實印とりに立ち
日の丸を持つて赤ちやん畔に寢る
二三分抱けば父ちやん事が足り　堺　渡邊曉童
地下鐵へ乘る間も千人針たのみ
落が良い悪いと夫婦五十すぎ
寶塚僕は飲めさへすれば良し
金光さんをさぼつてニュース映畫みる
名乘り合つたが乘替が次へ來た
來られては困る名刺を貰はれる
滿員電車に社長の供も又難し
一別以來貧棒だけは變らない
浪花節見たいに故郷を名乘り合ひ　今治　長野文庫
足袋の値に去年の足袋を探させる
滿ち足りた人とは人が思ふのみ
考古學專攻とかで世に疎い　廣島　濱田久米雄
迎春の一番先は奉公日
ほろ醉つた足許でゐる乘り遲れ
乘り遲れお宅は鍋をかけ直し
日本刀お家の流を試す日ぞ
十二月おとなしい娘をあはてさせ　愛媛縣大洲　今川椋影
天一つ日本の土支那の土
僕敢へて洒落るにあらずトイレット　防空演習
空襲警報犬もたゞ事ならずとし　統制經濟
統制は目から鼻へは抜けさせず　母病篤し
病む母のとかく亡父のこゝにふれ　北支　月原宵明
つはものゝ寢物語りは母に觸れ
孝行をせねばならぬと支那にゐる
銃執つて青春通過悔いもなし
豚が鳴く今宵は豚の汁と知る
傷兵の何を求めて佇るめ
手のとゞくとこへ傷兵寫眞おき
曼珠沙華ここらにほしや勇士の碑
展望の日章旗から時雨れて來

募集句　一路集

三ケ日　豆秋選

三ケ日日本に餅と酒があり　水客
三ケ日だけは子供のよいパパー　風葉
三ケ日まゝごとしてる若夫婦　東狂子
縫ひ紋でおさまつてゐる三ケ日　九呂平
女房も寢てる時局の三ケ日　丁字樓
三ケ日せめて病床揚げておこ　みづほ
菊正も屆き三ケ日待つばかり　白鷗
三ケ日師を訪ふ事に決めてゐる　愛鳩
嬉しさは島田で暮らす三ケ日　照波
三ケ日楷書ですこし書いて見る　靈子
稼ぐ幸しみ〳〵と知る三ケ日　葉光
國策へ醉うてはならぬ三ケ日　異天樓
三ケ日未だ失敗はせずに居り　市多樓
三ケ日モンペに留守は廣すぎる　一龜
蔭膳にぞうにが匂ふ三ケ日　青風
三ケ日默つて銚子つけてくれ　柳太
三ケ日ラヂオを止めたまゝ遊び　紅多呂
三ケ日聊か醉つて寢たと書き　文庫
三ケ日過ぎて定期も買ひにやり　神樂
ちと醉うてこますにごうの三ケ日　鮎美
三ケ日胃が悪いとはなさけ無い　惡源太
改めて子の年を聞く三ケ日　同
女給から呼出しが來る三ケ日　潮花
三ケ日だけは女も猪口を受け　同
(五)父親の醉うのを笑ふ三ケ日　普天
(五)三ケ日挽馬は暇な顏で居る　風葉
(五)働らいた手を勞はりぬ三ケ日　芳泉
(五)三ケ日子供の顏を見て暮す　破衣
(五)ごみ箱の蜜柑の皮も三ケ日　春巢
(人)子のことで笑ひつゞける三ケ日　鮎美
(地)むら〳〵としたを押えた三ケ日　久枝
(天)三ケ日故郷の雪にみなとゐる　水客
(軸)こつぼりの鼻緒がきつい三ケ日　靈子

屏風　夕鐘選

六曲の屏風に躍る龍の渦　照波
せり市の屏風が賣れた大晦日　風葉
屏風から日本男子の殖えた聲　抱逸
珍客へ見せる屏風をひろげとき　靈子
姐はんに調子借つてる屏風裏　普天
屏風の影に匂ふ煎藥　みづほ
病床の屏風甲上になだめられ　葉光
院長は屏風を譽めて立ちあがり　惡源太
應京の屏風と云ふを遠く見せ　東狂子
金屏風月子熱して伸び上り　異天樓
秋深む部屋病人へ屏風立て　市多樓
金屏風高潮してる謠聲　九呂平
安產を屏風の向ふで氣をつかひ　紅多呂
寫眞屋に指圖されてる金屏風　柳太
寢るに厭き屏風に厭きて未だ癒えず　文庫
正面の屏風へおじぎさせられる　水客
猫ふつと屏風の金におびへたり　同
あるだけの屏風を出して嬉しい日　春巢
耳打は屏風の影へ連れて行き　同
妓のかほは屏風へ向ひて舞ひはじめ　鮎美
水害の屏風こゝまでしみがあり　同
(五)かなしみを枕屏風が包んでる　彌生
(五)遺言か屏風に洩るゝ深い息　抱逸
(五)產見舞屏風の中をほめて去に　芳泉
(五)病室の屏風思案の影が折れ　潮花
(五)由緒ある屏風見てゐる晝の酒　鮎美
(人)金屏風今しつかりと結ばれる　青風
(地)松風のこもる屏風へ茶がにほひ　久枝
(天)母はまだ屏風へ昨日の夢を追ひ　水虹
(軸)歡びの裾を屏風の影へ曳き

柳川

二千六百年史（一）

戸田孤篷

歴史の中に柳咲があるかどうかは別として今年は二千六百年、いさゝかの祝意を十七字にこめて——

神代

○天照大神

日の本の國の初めは申すもかしこき日の大神、万物に生命を與へその生成發展をみそなはす

天の幸地の幸生きとし生けるもの

大御神天上にあり伊勢にあり

このかげがへのない大神が岩戸隠れ遊ばしたんだから天高原は大騒動、踊と歌の起源だといはれる大饗宴が岩戸の前で開かれた。ヒロインは列のお多福さん、しかし

段取の順に岩戸の前に坐し

まだ〳〵と女神へ手拍子足拍子

笑ひ死ぬ一歩手前で岩戸あき

○素盞嗚尊

天上は元通りの明朗さを取り戻し、事の起りの素盞嗚尊は下界へ。そこで勇猛な八俣の大蛇退治となる。

おや箸だ流の上に人が住み

○瓊瓊杵尊

八咫鏡、八坂瓊曲玉に叢雲の剣を加へ三種之神器として大神勅とゝもに皇孫に御授けになり天孫降臨の盛儀はじまる。

草も木もみんな高千穂見上げたり

大和時代

○神武天皇

日向御三代を經て、天皇の大和への御東征、七年に餘る御苦心が橿原に御即位の日と實つた今から二千六百年前の出來事で二月十一日の紀元節こそこの紀元元年辛酉正月元旦を壽ぐ日にあたる。

舟師泊り泊りに宮が建ち

金の鵄人間共は眼があけず

○日本武尊

日本國をひきゐ給ふ　大君の御苦勞。皇子小碓尊には熊襲に蝦夷に御座の温まるひまもなかつた。

好色の熊襲の手下見逃さず

首を掻かれる御手とは知らず

管を捲き

吾妻はや今日もこんなに晴れてゐる

○神功皇后

弟橘媛の悲歌は吾妻の名とゝもに殘り、神功皇后の御勇名は新羅をはじめ三韓にひゞき渡つた。女性の御身又御國の發展に捧げ給ふ貴さ

新羅敗け熊襲はものゝ數でなし

御慶事を拜し宿彌は涙ぐみ

御遣業へ皇后宮の男髷

○仁徳天皇

かくて御産れ遊したのが八幡樣即ち應仁天皇、その御子が仁德天皇、三韓征伐のあと大陸文化は論語千字文をはじめとして續々流入して來て、豊かな君臣和樂の御世が現出した。ことにかしこきは天皇の御仁慈。

大君が先ず人倫をふみ給ひ

やせた手でみんな皇居を伏し拜み

女宮まで煙の數を數へ出し

○佛教傳來

太古以來の民族制度の弊がよ

うやく顯れはじめた。欽明天皇の御宇百濟聖明王より傳はつた佛教が一視同仁の思想を植ゑつける。但し親子、兄弟で崇佛賛否の論が暖はつた事だらう。

神罰もこはし佛の顔もよし

○聖徳太子

佛法を以つて民力刷新を劃てられたのが御太子樣。あらゆる文化層を動員して和の世界建設に邁進遊された。

十人へ十答臣等啞然とし

○遣隋使

對外的には「日出處」「日沒處」の文字を以つて御太子樣は千四年前堂々と大陸と對等の國交を以つて開始遊された。

遣隋使今日の日の出を負ふて發ち

衣裳箱出してあれあれ隋の岸

○大化改新

崇佛派の巨頭蘇我氏の權勢は極まつて惡道の境に達し、中大兄皇子後の天智天皇の御下藤原鎌足らによつて誅せられ、民族制度の宿弊を一新、統制主義による强力な中央集權を御定めになつた。これが大化の改新で明治十八年までその形がのこつてゐた。

崇佛派勝つて入鹿は恩に馴れ

御沓がぬげて大化のはかりごと

云ひたい事を云ふページ（其の三）

萬引

姫田夕鐘

去日松坂倶樂部の句會で席題の「萬引」で天に入賞して短册掛を頂戴した。閉會後川柳展及びデパートを歩き廻り歸還市電に乘ると向側に掛けてゐる人々が僕ばかり見てゐる。はて不思議なことであると。ふと手にした賞品に氣付と同時にぐきり——とした。筆太に「萬引」とあつたので。

★

愛媛・大洲　今川椋影

「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」となん古人のされけれる。

松竹かざる初春を迎へてげに味ふべき言の葉とぞ思はるゝ。

★

福田　山雨樓

僕の名は義達と讀むが珍らしいのか仲々同名のものが見當らない。生れて三十年目にやつと見付けたのが鄒義達と云ふ人、大毎に老酒の話を書いてゐた。次に探し出したのは宇高義達といふ明治四十五年東大卒業の工學士。元對島國主に何とか義達といふのが嬉しい記憶にある。ところが四人目が最近目についた。元大毎本社會長故岡實博士の三男東京高等學校在學中の岡義達といふ方。しかも振り假名も僕と同じである。何だか會つて見てたい氣がする。

牧歌

岡田某人

頭の中に計算器があつてやかましくつて仕樣がない。一ぱいやると、それが風車か何かに變つて來る。飲み足りない時でもエスカレーター程度に牧歌的になる。——とは思ひませんか。

五錢で見つけた日本精神

戸田孤篷

レスリングを相撲と譯すべしと習つたのは中學生の時のこと似てゐるとすれば赤手相闘ふと云ふ點だけで、いかにも毛唐の考へつきそうな殿る蹴る仕舞にはリンクの張繩で首を絞めたりする、ほつとけばどつちかゞ殺されそうだ。土がつくか土俵を割る丈で勝負のきまるのと相像もつかない程恐ろしい違ひ、どこをつゝいても美などのあり樣がない。夜でも晝でも喰ふか喰はれるかの刺激が産み出した彼等のレスリングと自らの血の代償まで全アジヤの爲めならば始めから自分のものとしない我々のもつ相撲と同じ概念で取扱はれてたまるものか。三十分五錢ニュースの興奮。

勝つたんだシルクハットも冠るのだ。

和洋折衷

櫻川不水

商賣が船乘りだけによく毛唐さんにぶつつかる。大抵の場合は、エース・ノー・オーライ式でさら〳〵片を付けるが、此奴話せるなと見込まれたら大變、流石のブロークン王もたじ〳〵だ。だがそこは男、說明が邪魔くさい！

曰く「エース・オーライ、ばつてん、アイ・アム・ソリー、あかんばい」位でまくしたてたら万事OKだ。

釦貝

岡田某人

※

霞を吸ふて生きるか泥を喰つて生きるか。——いゝえ私は新鮮な野菜で生きてゆきたいです

※

うまさうな空氣。

※

氣の利いた言葉、美しい言葉これらは全然實用とは別である。普通の會話の中に混じると實にみじめで弱々しくつて、滑稽でさへある。

※

旅を思つたり、時間表を繰つたり、それはあんまり倖せな仕事ではない。まして、時間表を繰ることが只それだけに終つてしまふに至つては、いやはや。

※

行く先のきまつた、若しくは行く先に所用を持つての旅なんて、旅ではなくつて「用たし」である。交通機關の發達がそうしてしまつたのだ。眞の旅らしさは、一切の計算から離れた所にある。

※

「柳河」——ぼくの心のなかの柳河はぼくの柳河であるだけで實は白秋の柳河でもない、白秋の描いた柳河は——これは白秋ひとりの柳河である。土地なり地方なりの美しさは、土地なり地方なりそれ自身にあるのである。

※

風向きが變つたり、自分に有利になつて來ると恬として御用黨になり了せる、そんな人間反逆的精神に燃えてゐた頃をふりかへつて自分ではどんな氣持がするのだらう。狀勢がどんなに變らうと、どんなものにも反逆し續けねばならない樣な宿命的な反逆精神を與へられてゐる人間、これは壯烈にして、時には他人には恐怖をさへ感じさせる

滿蒙開發

隨筆

小山文三

滿洲は寒い所で且つ暑い處である事は日本人の常識になつて居る、日露戰爭頃に流行つた唄や、極寒極暑に惡戰苦鬪した兵隊さんの話に同情した寒暑感が多年培はれて、此常識となつたのは爭へない事實だと思ふ。

然し極暑の候に黑の夏服にチョッキを着けても汗が左程に流れないし、防寒外套に身を包んで極寒の新京を歩いても、雪の北陸を歩くよりも樂だつたりするのだから、あながちキツイ暑さ、こたへられない寒さではないのである。

金槌を持つて便所に入つて氷結する小便のツララを叩きながら排尿するのだ、なんて全く落語家や、漫才師の誇張語に過ぎないのであるし、雀さへ落ちる暑さだなんて言ふのも文字の國の白髮三千丈に類した形容に過ぎないのである。

況や夏は比較的風があるし、冬にはまづ〳〵風が少い、夏の夜は大陸性の涼しさがあつて多蒲團で寢られるし、極寒には暖房裝置で浴衣掛けで夕の一杯を杯しむのだから普通の生活には何の苦痛もないのみならず、却て東京の夏、冬よりも暮し易い事もあるのである。

日本產の馬が滿蒙に行くと極寒には自然に毛が延びて滿洲馬の樣に毛が長くなると言ふ事である、これはつまり其土地の氣候に從て自然が抵抗力を作るのである、凡そ人畜の生存する處は、日本人に堪へられぬ所はないのである。

新京から以南では年々歲々多が暖くなり夏が涼しくなつて日露戰爭頃に比べて著しく暮しよくなつてゐる樣であるし、殊に雨量が年々殖えるらしいのは喜ばしい事である。

「日本人が澤山入り込んで來てから段々多が暖くなるし夏が涼しくなつた。そして南京虫が段々少くなつて來た事は嬉しいが其代りに蚤が殖えて來たのに困つてゐる」とさる滿洲人が述懷するのである。

長春の都が新京と改稱されてからでも日本人は隨分南京虫に惱まされた。

いつぞや新京の警察では之れが撲滅を期して十四三錢で買上げた處一日にして數萬匹に上つたと云ふ事である。爾來設備も衞生思想も進んで來たから追々南京虫も少くなつて來てゐるが今でも新京あたりで絕無とは言へないので汽車の寢台にでも相當なホテルにでも往々之れにやられるのは止むを得ないし、嚴多でも室內暖房の關係から南京虫が死滅しないのは致し方もないのである。

滿蒙開發の爲めには先づ日本人が、どしどし出掛ける事である、澤山の內地人が永住の地を此大陸に求めれば求むるだけ資源の開發が成就する斗りでなく氣候も風土も段々內地化して住みよくなると思うのである。

一茶の六代目

福田山雨樓

一茶の末孫が鐵道に奉職してゐると云ふニュース。小林彌壽保君といつて當年十八、長野市の長野線路訓練班の一員として働いてゐる溫順勤直の好青年。父君は小林重信、母人は小林きそ女と云つてこの母人も亦鐵道人の緣につながれ、長岡保線區線路分區長駒村氏の娘さんとか當主は小林彌太郎氏、何れも何年前だか忘れたが故陸軍大將閣下が關東軍の檢閱に巡られた頃、或守備隊で滿期歸還の近づいた兵隊さんを前にして一場の訓辭を與へられた後

除隊後此土地に留つて產業開發の爲めに働かんとする氣慨ある者は手を擧げよ。

と命ぜられた處、殆んど皆が一齊に手を擧げてしまつたので閣下は御機嫌なめならずニコ〳〵し乍ら、或一人の兵隊に

君はどう言ふ譯で滿洲で働こうと思ふか

と聞かれたのである。

其兵隊さんは此溫顏に接して如何にも意氣揚々と兵隊言葉もいと明亮に

滿蒙開發の爲めであります

終りッ！

と答へた。

こゝ迄は滿點だつたが、疊みかけて大將閣下は

然らば滿蒙開發とは何ぞや？

と尋ねられると、兵隊さんは聲高らかに

ハア　忘れました、終りッ！

と答へたと言ふ事である。

此一挿話に無限の滿蒙開發の意義を託して筆を擱く。

（一四—一二—九稿）

一茶の故郷柏原で靜かに遺蹟を守つてゐられるさうである。

これがまあ終の栖か雪五尺　一茶

椋鳥と人に呼ばるゝ寒さかな　同

ともかくもあなたまかせのおらが春　同

伊勢から熊野路へ

大連　佐々木三福

廣島驛を十一月二日の朝立つたのはフマキラー招待會員同勢十四名、お伊勢詣でをした上熊野路に出て、熊野三社に詣り溫泉巡りをしようと言ふのだ、汽車中は「辨當」と「酒類」一切を禁語とし罰金制を設けるなど賑かな一行だ、一時過ぎ梅田驛着汽車を捨てゝ上六から參宮電車に乘換へ四時神都宇治山田安着こゝで會員更に二名加はり、直ぐ外宮さまから參拜した。

亙杉つゞき神威に打たれつゝ降る

其夜は二見浦泊り、お伊勢詣りは氣分を味ふべしなどゝ最初の夜から鼻呼吸荒く、土地つ子座にはべりて盛宴となつた。

○

二見泊りは日出を拜むのが昔からの習慣である。ぞろ〳〵と興玉神社前、例の夫婦岩のところに往く、やがて水平線の彼方から繪に有るやうな日出を拜んだ。

拍手に日本一の大日輪

朝食後ハイヤーで內宮さまに參拜した、丁度明治節に當つた日で全國からの團體其他の參拜者引きも切らず、五十鈴川の流

が本人にとつては悲劇でしかない。

＊

鼠――この野郎、また月を嚙りやあがつた。

＊

地球が圓いといふことは誰でも知つてゐる。しかも土地が平かであるといふことをも彼等は疑はない。同じやうに、修身書にある事柄が決して作りごとではないことを知つてゐながら、世渡りの上に現はれる嘘だとかインチキをも平氣で人々は呑み込んでゐる。彼等は一體、その邊の不一致をどう處理してゐるのだらうか。――知れたこと、眼鏡を掛けかへるだけさ。

＊

三月の風。まぜものあり。桃の木でなくつたつて、わきの下がくすぐつたくつてね。何、なにがまぜつてるつて。知れたこと薄荷少々。

＊

薄荷畑に月が出た。白いおほきな月だ。――これは使へる。

＊

薔薇と唄。それにちよつぴり月の色。さあこれで御婦人向きの舞台が出來ました。登場するのは、美しい少女――御見物衆のやうな。

＊

馬の背を降りた時から、世はとうとうと散文の世界となつて行つた。

＊

群がる敵に驅け入つて斬死せんこそ本望なるに、敵がをらん。かねて手入れの銘刀が徒に陽にキラキラするばかり。どりや、鉛筆など削つてこまそうかい。

＊

千大根の匂ひ。――霜が水蒸氣を上げてとけてゐる田舍の、眼にしみるやうな、滋養に富んだ空氣。ポロシボレーのかき立てゝ行つた薄白い砂けむり。何處かでかしわが鳴いてゐる。

＊

薔薇色の西陽を斜め横から身體一ぱいに受けて歸つてゆく紺セイラー女學生が二人。うしろから地をすくつてかけぬけた三月の風にあふられて、背の四角い肩布が一しよにぱつと立つてそれから一しよに元どほりになつた。五時。ちよつと先の高架の上の大時計がキラキラとしてふつと、かへつて淋しくなる時刻だ。

高瀬齒科醫院
特科――レントゲン・紫外光線
高瀬志可
東區內北濱心齋橋筋角
電話 東 四四二九番 北濱 一九二三番

れも一しほ神々しく見えた、御秡殿で一行の爲に嚴肅なるお神樂を上げて貰つた。

あな尊ふと神世からなる流れにて

之から一行は天下の嶮紀伊矢の川峠を省營バスで越えて南紀に出る事となつたから、山田驛から汽車にのり相可口で乘換へ終點尾鷲に二時過着いた、此地からバスに乘る、途は山を開き谿に架し、聽きしにまさる嶮岨なものである、道幅は僅にバス一台の幅しか無い、左手に幾十丈の谷を見つゝ二台のバスはあえぎ〳〵上る事一時間半の後、海拔二千八百尺の矢の川峠に辿りつきエンジンを冷やすために少憩した。

人力のやがては海の底の路

それから一直線に下つて五時和歌山縣上木本に着き新宮から汽車に乘じて勝浦溫泉に泊る。こゝでも酒宴が設けられた。

○

第三日、日本一の大瀧と稱さるゝ那智の瀧を見、熊野那智神社に詣でた。道々バス鶯孃の案内により其昔かず〳〵の法皇、上皇樣がこの道を御參詣あそばされた事を知つた、那智山は西國第一番の札所である。

そのかみの御幸の跡に苔むして

那智驛に下りて汽車で新宮に引返し官幣大社熊野速玉神社に參拜した、それから有名なプロペラ舟の客となり酒肴を用意して雨の熊野川を上つた。兩岸の奇巖にからむ雨の紅葉、酒盃は賑つた。舟が止つた。こゝは三十三間堂の柳の棟木を出したと言ふゆかりの土地で、案内孃のしんみりとした説明に一行の猛者も目をうるませた。

涙してお柳をしのぶ雨の舟

舟は本宮で捨てた。官幣大社熊野神社に詣る。雨の日は日暮が早い。バスで湯の峰溫泉に駈けつけこゝに一泊した。この地はまだネオンの灯など無い閑靜な溫泉場だ。

溫泉巡りのお國訛りも興を添へ

○

昨日の雨は名殘無く晴れて湯の宿の朝はすが〳〵しい。宿近くの小栗判官入湯の古跡など訪ねて湯峰を出立した。今日も又山路をバスで搖られ〳〵て南紀白濱に出るのだ。熊野の山々は何處迄行つても松杉檜等に覆はれ、都の喧騷からすつかり距てられて實によい氣分だ。秋の山路は一行の目を充分に樂しませた。其昔神々はこの山やあの谿谷を愛でられ、杖を曳かれた事であらう。日高川を過ぎる時安珍と清姫の戀物語をして呉れた人があつた。燃ゆる戀は蛇となつて河を渡つたと言ふ其流れは秋陽にキラ〳〵と光つてゐた正午バスは白濱溫泉に着いた。

熊野路のこの大峰も神のあと

傳説の河傳説の谷を越え

白濱の地は既に世に知られてゐる名所だ、風景もよく遊客を誘ふ色々の設備もよかつた、夜は最終の宴が開かれ土地つ子が歌つた、其夜十六名は相當なトラとなり、何れも心殘り無く四日の巡遊を無事に閉じた。

（一四、一一、一七）

「朝鮮雜記」を讀みて

姜 弘 龍

半島に住んでをられる弘津さんであつたらもつと研究して發表なさつたらどうであるかといひたい點が處々に見受けられる。この記事の目的が半島の事情を全く知らない內地人方に本當の半島の姿を、風俗習慣を知らせるにあるとせば、かゝることを本當と信じたであらう內地人方に濟まない事であると同時にかゝる事を本當に紹介された半島人の心外この上ないものがあるのである。「同姓者同志は絶對結婚出來ないことになつてゐる。」とは「同姓にして本貫の同じき者同志の結婚は絶對出來ない事になつてゐる。」との誤である。本貫が例へば京城である金は、同じく本貫が京城である金とは絶對結婚出來ないことは勿論、鮮干といふ姓と許といふ姓とは異性でありながら本貫が同一である理由を以つて結婚しないといふ特例もあるのである同姓であつても本貫さへ違つてをれば、例へば同じ金でありながら一方は本貫が慶州であり、一方は金海である場合は結婚差支なしである。要するにはじめの祖先の生れ地が本貫であるのだから同一本貫の者は同一祖先より分れた血統のあるものであるから、血族關係をやかましく云ふ半島人は同姓、同本貫同志の結婚を絶對に禁じてゐるのである。

× ×

「夫が惡いことをしても平氣でゐる」夫が惡いことをしても平氣でゐるといふ惡いことはどんなことか、具體的にかいてゐないから分らぬが、どんな惡いことにせよ、夫が惡いことをするのを見て平氣でゐる樣な女は恐らく半島十三道の內どこへいつても皆無であらう。昔から男尊女卑の觀念が強い爲に、夫のわがまゝをこらへ忍ぶを美德としよく服從「內地人婦人のよく夫の職業を理解し、夫に出來得る限りの慰安を與へんとする服從に比ぶれば盲從の方ではあるが」はするけれども、夫の惡事を平氣で見る樣な女は半島にだつてないのである。內鮮融和から內鮮一體を具現しつゝある今日お互に正確な認識の許に長期建設に邁進しようではありませんか。苦言を述べて筆を擱く。弘津さんよ筆者の心情奈邊に存するかを諒せられよ。

出征・入營はこの歌で送りませう
陸軍省撰定 大日本雄辯會講談社募集一等當選歌・キング歌手總動員
キングレコード吹込
（一枚 一圓五十錢）
32
出征兵士を送る歌

漫畫陣中鏡(4)

中支 北 みきを

×月〇日

小休止で駄ボラを吹いてゐるとゲツプが出た。〃クリーク臭いぞ！〃と戰友がいつた。野戰料理をクリークの水でやるためである。内地の水に較べて、クリークの水はやつぱりどうも水臭い。（駄ボラを吹くとは無駄話をするといふ兵隊語）

「凧や」の辭世問題に關聯して

——病室手帖 その三——

・蛭子省二・

龍寶寺句碑に就ては、三四年前「東北川柳」誌かに寄稿したと思ふが、今それを天井裏から探し出す氣力がない——病人の我儘を許し玉へ——因て「川柳墓參法延會」（明治廿二年版）から寫す。

石碑は翁五十回忌の節五代目川柳の建設なしたる者にて根府川石を以て造る香華院淺草龍寶寺本堂前左の方に在り傍らなる一幹の柳は同翁手親う植附られたる由にて今は直徑一尺五寸の大木となり年々歲々技業繁茂して變ゐ事なきは此の道隆盛の兆と謂ふ處は有名なる田畑松軒翁の筆にして

今茲に寫し出す者は翁の高弟伊藤松琳先生の筆なり予は先生と交る事久し依て今回の事を依賴せしに先生も亦先師の水塋を慕はるゝの餘り態々該寺に赴かれて親しく閲見の上寫されしものなれば處體毫末も變る事なし碑面後背に左の通記あり

干時天保己亥九月吉祥日
五代目 川柳
世話 惣連
松井川柳五十回忌爲追善建之
催主 壽山 舛丸

一切が判明する。（註、「番傘」に外丸及村山松軒とあるは誤謬 田畑松軒の人物に就て、友人が平凡社の人名辭典外十數種を調査して下さつたが、更に記載なしと。）堅四尺横二尺乃至二尺五寸位で柳は代替り、前の住職亮榮氏により仕繼がれたものがあつた。大正十二年大震災の厄に逢つた破片はどう始末されたかは知らぬ。東京の川柳家が一個でも貰らひうけ保存し置かれたならば記念物である。當時私はその事を某氏に語つたのであつた。

次に木母寺内の句碑に關しては、私自らの怠慢至極なるを後悔して居る。木母寺へは行つた。佞翁と共に杖を曳いた事もあるのに、全然頭に浮んでこない。幸にも現存し佞翁は十月十六日に實見に出掛けられた。丈六尺巾四尺斗なりと。この碑が今度初代川柳頌德碑らしく誤解されかけて居るので正さむに

四代目の碑は向島木母寺境内に在り右は初祖に先立ち文政九年の八月風松なる者の企てに因り當時の人々打寄て創建せしものなりとぞ表面には東都俳風狂句元祖川柳翁之碑と隷書にて記す但し筆者詳かならず裏面は苔埋れて文字不分明なり此頃友人實子氏と共に同所に赴き人を雇ひて附着せし苔を洗ひ清めたれど石質の粗惡なるが爲彫刻の鑿淺きにや半は讀む事能はずされど總評末廣會として凡そ三十句ほど鐫つけあるを僅に見認たり

但し碑面に元祖川柳翁とあるゆゑ誰しも柄井翁即ち初祖の事と思へど左にあらず是ぞ四世川柳の壽碑に相違なし四世は元祖傳來の前句附けを始めて俳風狂句と改稱せしゆゑ茲を以て狂句元祖と自稱する由古老より多き傳へたれど猶疑はしければ一日人見家（四世の子孫）に到り古き書物を取調べしに全く四世の壽碑なる事を確に發見したり依て疑ひを解ん爲め故らに記し置くものなり

とあるから初代には無關係のもの百樹氏の欲せられる參考にはなり兼ねるやうだ。

明治代新川柳の旗下に集つた者は狂句撲滅を期した爲に、舊派の人々とは交際がなかつたので、川柳史を究めるには不便多大。その間、狂歌大家秋農屋翁を介し、總て教へられたもの、本誌（自昭和六年九月至七年四月號）上の「川柳幽明無線電話」に依つても推知されようし、「五月鯉」（明治卅九年十月號）の「川柳の遺物」など後代への資料である。「湯の村」（第四一號）に九世敬寫の初祖畫像を掲げ、同誌第四三、四七號に祖翁畫像解說及補錄の拙稿に陳べた如く、四世か呉服橋連二代目武隈庵松哥の筆であるかは詳かならざれ共、畫像に左の三句が記されてゐる。

行水やおもかげうつす夏柳　四世 川柳
寫し繪や幾秋經てもその姿　八十五 文日堂礫川
凧やあとで芽をふけ川柳　栖井 川柳

「礫川翁の年齡を以て算すれば天保四年の製作なる事明瞭也」で、即ち辭世として錄されて居る。

「凧」吟が拙劣な句調であるか否やは、曾て卑見は陳べた。東魚氏の一文は此點に就て百樹氏に對抗されたものであり、又、川柳家の總てが吟味して可なりと思ふから、私は繰返す事を略す。詩見地から缺點を見落し得ないが、私は辭世は其儘享入れ我執を斷絕した無心な態度で川柳佛に跪拜する。（「湯の村」第五三號參照）爰で辭世の善惡を論ぜんやだ。たゞ佞翁の「川柳が白川樂翁の政治上の手段の爲に、訓戒統制文武奬勵の爲に、一切重壓を加へられ當時の正直な人民はそれを如何程に神經に病んだであらう、其世情の激變を考へて詠まれたのであらう」との說には、遺憾ながら贊同し得ない。これは御贔負筋丈けのものと思はれる。

人間未完成——栖井川柳未完成で可なりと私が言つたのは昭和十年の事である。餘は次の日に述べたい。

お食事 とんかつ 湖月 築地法善寺境内

若き社員を募る——
御希望の方は先づ履歴書をお送り下さい面會日を通知いたします
（營業部・編輯部）
川柳雜誌社

上海便り

上海支部 植山九天

國際都市の一角、軒並に獻燈がゆれてゐる。（十一月一、二、三日上海神社大祭）東亞新秩序建設は獻燈からと言ひたい。來れ次男、參男坊たち、大陸は君等を待つてゐる。ついでに上海の居留民は十月末現在で五萬七千餘人であることを御知らせする。

濕布に
エキホス
感冒、肺炎、
乳房炎、腰痛、等の遺憾なき手當…に
月經痛、齒痛・
EXIMOS
包裝 100瓦 300瓦 500瓦 一斤
C—30

吟行

高槻から牧方まで

――松坂倶樂部川柳講座の人々――

（笠森稲荷社前にて撮影）
前列向つて右より笠森稲荷の社家中村勇氏と路郎・普天・丹路
（後列）耕二・孤蓬・美根子・方正・生々庵・白面人の諸氏

ミステリー吟行の一行

十一月十九日。ミステリー吟行と云ふ觸込みで路郎先生の下に松坂倶樂部川柳講座の普天、耕二、生々庵、方正、丹路、白面人、孤蓬それに紅一點美根子を加へて九氏大阪驛に集合。改札口を出てから晝辨當を開くまで一切外國語禁制。反則のトツプを切つたのが「メモ」とやつた發起人の白面人氏。うつかり洒落も飛ばせないといひながら續々禁に引つかゝる爆笑の省線電車が高槻驛につく。

キヤラメルの足らぬは下車（おり）てから仕入れ　白面人

そこではじめて先生から笠森稲荷の本社探求の託宣がある。九人が九人あるのかないのかわからない目的へ歩き出す。晴れ渡つた秋空が顔負けする程ベナルテイ纖出に笑ひこける朗らかな一行。

さて問題のお稲荷さんの發見は顔中皺の梅干婆さんが「あゝ笠森さんだつか、」といつてくれたので存外簡單に處がつく。但し二萬五千分の一の地圖にものつてない荒れ社。「土のだんごか米のだんごか」の土だんごが供へてあつたので間違なしと確信を得て、社の隣に住む社家中村勇氏を訪なふ。村の校長さんである同氏は素朴な口調で緣起を語り、愚問に答へ內陣に招じて寶物やら資料やらを見せて下さる。

笠森は立體的に繁るのみ　方正

年代をしらべて見たい額もあり　耕二

秋ふかく誰が作りし土團子　丹路

柿うまし笠森稲荷荒れるまゝ　同

土團子賣ふて歸る氣になれず　美根子

校長らしい眞祿見せて說く緣起　同

社家と云ふ誇り田地の事にふれむく鳥の話も古き社家らしく　同

訪へば先祖のゆかりから話し　同

たゞたのむ土の團子の一ト重　路郎

心易う笠森さんは賴まれる　同

早いつもりがいつか晝書に近くなつてゐた。案內狀通り御持參の辨當を開く場所を物色して社の裏手を流れる芥川の堤に出る。雜木の紅葉が美しい。やをら腰をおろす。

この邊がよいと堤で尻をすゑ　方正

外國語使用解禁。マイナスの最高點が孤蓬。無傷が路郎先生と普天氏。「チヨコレート」「サービス」「ブラン」「ハレーション」等が堂々と口を滑つた事を記錄係が報告する。

業平の芥川が御歷々の色ざんげに及ばうとした時殉難碑の前へ出てシーンとなる。歌書よりも水禍に悲し芥川である。

碑（いしぶみ）を讀んでみんなに遲れかけ　白面人

芥川の街を通りぬけ高槻町の東郊伊勢の墓と能因の塚をおとずれる。

稻刈の手を止めさして道を聞き　白面人

この二つはいづれも高槻十景とかに入つてゐて、どつちでも突劍どんな口のきゝ方をする人にぶつかり、笠森さんでうけた好印象をこはされ勝ち。伊勢は百人一首の伊勢大輔でなく鎌足公十代目の孫娘とかで祠は高台の上にあつた。伊勢姫と云ふからまさか八十までも生きてゐなかつた事にして拜んでおく。

麗人だつた事にして伊勢姫拜まれる　生々庵

心ないカメラ千年の墓にむけ　同

能因さんの方もお墓のみえる所までにして引返へす。

三脚で柿など落す手もみつけ　孤蓬

能因の墓もインチキかと思ひ　路郎

高槻驛までの路、普天氏、美根子氏、孤蓬氏おくれ勝ち。

足弱の仲間にほこり多き道　孤蓬

驛前で待つは彼女であるがよし　方正

バスで淀川を渡り牧方町「かぎや」老亭に入り句會。

トラックも通り「かぎや」も恙なし　孤蓬

路郎先生の笠森緣起、白面人氏の稲荷講座、席にちなんだ孤蓬の三十石ばなしなど賑やかな數刻の後清遊を終る。（孤蓬記）

古書籍賣買

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二番

古本天牛本店

大阪道頓堀
電話南二七四八・二七四九

——影撮氏人面白——氏諸のるほか●秋豆●々鋭●郎路●樂艸●蓬孤●美鮎

月評 川柳一ト筋

路郎・艸樂・かほる
鮎美・豆秋・鋭々
孤蓬・白面人・亞鈍

〳〵と頭を下げてゐるといふいま〳〵しさとサラリーマンの悲哀といふものが躍如として居つて、兎に角佳い句だと思ひます

鋭々＝さあ、誰方か御意見を……。

孤蓬＝氣どらない素直な句ですな。然し、素直なといふ事以上に、いふ言葉がないやうに思ひますが。

鋭々＝それはこの——所謂人物の立場が、やゝ曖昧な點があつて、本人がこの句を詠んだのなら確かに手應へがありますよ

孤蓬＝そら、一體どういふ風に？

鋭々＝つまり、子供の心理狀態を出したといふだけで外にもつと強くいふものがないのであつて、こんな場合想像されるのは別の人が子供の心理狀態を詠んだとすれば、それ丈で、稍々力が弱いと感じるんです。

孤蓬＝しかし、この見るといふことですな……。

鋭々＝さう、これは父をみるといふので、自分が見て人がみるんではない。がみるでなしに他の事を表したら、よりはつきりするんですがな。しかしこの句では仕方がない。

豆秋＝破衣さんと川柳雜誌社で逢ひましてね。"生れてはきたけれど"といふ映畫を此の間觀に行かれたさうで（孤蓬＝小津安次郎の監督でしたね）それからヒントを得たんださうです。しかし句としての獨立性があると思ふんです。

孤蓬＝ありますね。ひつかゝらない句ですね。それ丈に頭をどやしつけられるやうですな。

豆秋＝まだ川柳を始めて、二三ヶ月しか經たないとか……。

孤蓬＝そうですか。此の句の前の〃千人針尼僧の下駄の緒が白い〃も面白い。

路郎＝僕は、〃うちの子も混つて柿を盜りに來る〃が面白いネ。

孤蓬＝私は〃千人針……〃の句にチェックして置いたんですが……。

××＝〃白ボクを持たせばイキナリ大日本〃が良いですね。

孤蓬＝みな、この句が良ろしいといふことになりますな。（笑聲）

鋭々＝それ位で可いですか？

孤蓬＝先生！　どうで御座います？

路郎＝まあ、この程度だね。

鋭々提出＝近作柳樽

立哨中異狀なし雹落つ
月原宵明

鋭々＝戰地生活に於ける緊張味の中に多分の詩情、豊かな詩情を持つた詩として推稱したいと思ひます。中七の異狀なしと五字で出來てゐるのも却つてその情景を適切に表はす効果が出てゐると思ふ。私のはそれだけです。

孤蓬＝異狀なしは、ルマルクの「西部戰線異狀なし」といふやうな短縮の仕方を持ち、同じやうな効果を上げてゐます。その靜かな異狀なしの中に、どんな音して落ちるのか雹の音は知りませんが、とにかく果物が木から落ちてきたやうで、やはり銃後に居つては判らない詩の世界かと思ひます。

鋭々＝雹は果物より木の實の感じですな。

孤蓬＝（意外といふ風に）そうですか。固いですか？

鋭々＝小さいものです。

孤蓬＝バタンと落ちるのでせう？

鋭々＝ポトンと落ちますね。

豆秋＝巡察將校が廻つて來た時に、別に異狀ないかと問はれ「ハイッ！異狀ありません!!」と歩哨兵が答へたとこで、雹が落ちたといふのは少し想像が過ぎますか。（笑聲）

孤蓬＝アハヽ映畫的ですな。

豆秋＝それは想像がすぎ……

路郎＝構はないね。それはあり得る事だからな。

鋭々＝雹落つといふので非常にローカル・カラーが出てゐますな。

豆秋＝さうですな。

孤蓬＝椰子の實のやうなものが、ばたつと落ちたやうに……（笑聲）

路郎＝あんたは、何でも大きなものにするからな（笑聲）——筆者註、孤蓬は體重二十三貫を超ゆ肥大漢なり——

孤蓬＝ウアハハ私、雹の實と知らなかつたんで。さうか宵明さんは北支でしたね、南支の方面を考へてたもんだから。

路郎＝雹つて、小さい時にはよく喰べましたがな。

鋭々＝美味しいものです。

鮎美＝下五の雹落つで、確かに宵明さんは童心にかへつてゐると思ひますな。斯ういふ緊張味の中でも詩人の見つけ所ですな。或ひは宵明さん、その落ちた雹を喰べたんかも知れませんね。（笑聲）

路郎＝ぢや、それ位で僕一つ出さう。

路郎提出＝近作柳樽

爆撃の跡で蛙は泳いで居
酒井美知夫

路郎＝此の間僕は住友の親友會の句會へ出て聞いたんだが、その席に居られた某君が、戰闘中に美知夫君に逢ふたんだね。その時に美知夫君が「オーイ!!句が出來るかッ!」つて叫んだといふんだが、なんと云つても美知夫君には勝てんと言つてたがね。さういふ男だけにこの句を讀んでも非常な激戰の跡に蛙を詠むといふ詩心と度胸が出來てるわけで、今までの大きな戰ひを茶飯事のやうにして、恰度芭蕉が、古池に蛙が飛び込んだのを觀たやうに、美知夫君は泳いでる蛙をみたが、おそらく、芭蕉以上のものをみたんぢやないかと思ふ。

孤蓬＝戰地から送つてくる句で、一番良いと思ひます。

鮎美＝今日の私の便りに、少し負傷したといふことですが。（一同何か衝たれるものあり、沈默。）

豆秋＝よく手紙が來ますね、うつかりしたら、こちらから出す手紙を缺かすことがあります

路郎＝兎に角、村中の殆んどの人に何回か手紙を出してゐるさうだからな。

鮎美＝ハハアン。そんな調子で、戰闘中に句が出來るかなんて、手紙みたいに出るのでは勝てませんね。

路郎＝もう一つ、同じ作者の句で〃何氣なく思へば今日は誕生日〃といふ句が、絶えず死線を越えつゝある人の句として感心させられるね。——この時、白面人出席——

かほる＝京都の柳太さんの〃明治節子供の誕生日を忘れ〃とえらい違ひでんな。

鋭々＝それは、どういふ風な……？

かほる＝それは、どつちやも誕生日のこと、感じはつたんでつしやう。そやけど、こつちの方が、えらい深刻でんが——。——この時、艸樂出席——

鋭々＝同舟近詠で一つ……。

鮎美提出＝同舟近詠

長男のきつい言葉に母が泣く
潮田明坊

鮎美＝この頃、映畫や芝居などで「母」といふのがよく出てゐますが、劇中の母なんかにも長男が非常に重く用ひられて良妻賢母でいつて幸福になるといふストオリーですが、此の句から受ける感じは菊池寛の「父歸へる」のあの長男を思はれます下五のがが、どうかと感じましたが、他の場合ではがの字は落弟點の方が多いが、この場合ではがが非常に効いてゐると思ひました。そしてこの言葉の裏に父といふものも聯想されて來て日本の母の心强さが充分に出てゐると思ひます。

艸樂＝ずつと以前の月評には出てゐたが、復活してからは、まだ一遍も出席しなかつたのですが、やはり、提出句を說明するのですね。

鮎美＝さうです。今度のは座

輝しい新春のお姿を！
工藤清寫眞舘
大阪市西區土佐堀船町
電話土佐堀五五五〇番

談的にやる研究會で、少し前とは違ひますが、どうぞ一つ。

艸樂＝ぢや、私、一寸――。この鮎美さんの今の菊池寛の「父歸へる」の例を引かれて稱揚されました點に就て、私の常に望んでゐることは、或ひは無理な注文であるのは自覺してゐますが、畢竟、此の句の長男のきつい言葉で何か具體的なものがないために必ずしも鮎美さんの言はれた通りに讀者が百人百人共理解してゐるかどうかは疑はしい。これは川柳の短所でもあるし、作者はそれ丈多少の留意がなければならないと思ひますが、それが短歌なんかでしたら下五から、放浪の父は歸りきとかいふのが附いて事件が解ることになるのです。そこで此の句では長男であるから、次男とか妹とかが母に甘へて無理を言つてたのを長男がきついことをいつて下の子を叱りつけたといふ風に解釋出來んこともないのですが、きつい言葉が、抽象的なる故川柳はこれで可いのか――とも思ひますが、私自身は何か作句する場合は具體的なもので表現したいといつた意見を持つてゐる者です。

鮎美＝私はきつい言葉で「父歸へる」に當て嵌めてみたんですけれど……。

銳々＝僕もこれは、リマークした句ですが、ある一事件に直面した作者が、その事を表はしたいと作られたのだらうが、これ丈では少しも具體的な事柄が感じられず、若しも斯ういふ場合があつたとしても此の句から受ける感じは何となく自分としては不愉快に思へて、あまり好きな句でない。尤も斯ういふ場合を川柳として詠むときは關聯する句の深刻味、或ひは鋭く事柄を詠んでは不可いといふのではないですが、それなれば、それで今艸樂さんの言はれたやうに、もつと讀者に判然としたもので表はして欲しい。これだけでは作者だけが勝手に、その句境を樂しんでゐるものと思ひます。

艸樂＝もつともですなア。詩といふものは一つの默契で存立する場合があるけれど、私の言ふ事が正當か、どうかは判りませんが、川柳に對しては、さいぜん申しました事を主張したいと思つてゐるだけでこれが川柳を批判する場合の當を得たものかどうかは知りません。

路郎＝大體、今の兩君の意見は正當なものと思ふ。しかし抽象的な表はし方によつて句が成立する場合もあるが、成る可く艸樂君が言つたやうに、具體的なもので讀者の胸に適確に浮びあがらすやうにするのが本筋のゆき方でないかと思ふ。よく寂しいとか、悲しいとか抽象的な言葉を使つて、自分一人寂しがつたり悲しがつたりしてゐて、第三者に深い感銘を與へてゐないといふのは、全くその實例ではないかと思ふ。

銳々＝ぢや、かほるさんに一つ次を提出して貰ひませう。

かほる＝わて、かんにんしとくんなはれ。（笑聲）

路郎＝（微笑し乍ら）全國の讀者から期待してゐるんだがな。先日も「關西日報」の柴谷君に逢つた時も、毎月の月評が大變面白いと云つてかほるさんなんかも、もつと出て欲しいつて言つてたよ。

（銳々、その間に席を離れ、無理に、雜誌をかほるに當てがひ强引に提出を求む）

かほる提出＝川柳塔

龍田から法隆寺へ遊ぶ

秋晴れへ乘合なんていらぬもの　橋本絲雨

かほる＝かういふ感じ、今でもしまんなあ。そんだけでしまひ。（笑聲）

孤篷＝もうぢき、乘合なんかいらぬもの、ぢやなしに乘せてもらへんのと違ひますか。（笑聲）しかし、この句は文化に逆流した面白い句ですな。流石にかほるさんのお見つけになる句だと思ひます。

銳々＝歩いてゆく方が可いといふのですか、或ひは歩いてゐる人が、乘合が邪魔になるといふんですかな？

かほる＝乘合を待つてんのに、來えへんといふ時でつしやろお。

艸樂＝此の句は絲雨さんらしい即興の句だと思ひます。龍田から法隆寺の方へ歩いてれば、乘合なんか何ら必要ないといつた意味のもので、バスに乘つて早く行かうとしてゐる人もあるけれど、自分の遊んでゐる身には乘合なんかいらない、殊に天高き秋晴に乘合なんかいらないといつた即興的な絲雨さんらしく、これは理窟やなんか、つけたら作者の心境を感得しないものだと思ふ。この句は理窟なしに、此儘受けとれば可いですね。

豆秋＝理窟はないですな。しかしバスや電氣を否定したら絲雨さんは電氣局から叱られる（笑聲）。へへへ……。このまゝ歩いてゆきといふ句ですな。

孤篷＝私、京都にゐる時分（筆者註、京都帝大在學中）歷史を研究してゐた時に、あの邊で醉うてしまつてゐて、タクシーが乘れず、山から拾つて來い！なんて怒鳴りましたが……（笑聲）

鮎美＝歩いたら、又二、三句出來ます。（笑聲）

路郎＝絲雨らしいといふ言葉が出たが、絲雨君ほど現實と取ツ組んでゐる人はない。秋晴の良い空に對して空想的でなしに、すぐ乘合をもつてくる所などね。

艸樂＝絲雨さんは、全く現實と取つ組んでゐる架空的なとこが全然ないんですよ。

路郎＝それが絲雨君の個性でもあり、有りのまゝなんだから一歩外れると、いけないものになるんだな。

艸樂＝盧勢といふものがない

路郎＝そりや盧勢なんかないさ。ありのまゝなんだよ。

孤篷提出＝川柳塔

ヴエヂタブルサラダ綺麗な話する　岡田某人

孤篷＝そろ〳〵サラダの出ても可い時間ですから（笑聲）一つ。……これも絲雨さんぢやありませんが、作者を拔いて聯想すると、ドライでサラダだけを喰べるといふ、さきの豆秋さんや鮎美さんの言はれてたやうに芝居の場面を想像するやうな、非常にこの詩人が詩を創つてゐながら、もう一つ詩の中へ這入つていつた、何とも言へない句だと思ひます。この片假名のヴエヂタブルサラダといふ言葉と目でみる感じもなにやら綺麗な氣がします。もう一つ想像をしてみたら（白面人―喰べたらなほえゝやろ。）何を言ふねん――この情景の中に一人の女性がゐて、その女性とプラトニック・ラブ以上のところへはいつてゐないと思ひます。（笑聲）

艸樂＝私はね。かういふ句をみた時に孤篷さんのやうに聯想は、ようしない――私の缺點でもありますが――しかし、何かしら斯ういふ句から詩的感懷に耽る事がある。それだから、この句に興味が持てるのであつて作者はもつと私のやうなのよりは高踏的な詩的感懷をもつてゐるでせうが、しかし何か歌屑のやうに思はれて完成の域に達した作品とは受とれないが、それでも或る詩的感懷を呼び起される。近來、何かの傾向によつて作家は努力してゐるけれども、川柳であると納得するまでは尚遠いものがあるやうに思はれる寧ろ川柳を離れてゆくやうな氣がしないでもないが、それでも構はない何物かを把もうとする川柳家の努力は買はねばなりますまい。

豆秋＝ヴエヂタブルサラダといふのは、音樂的な言葉だと思はれます。リズムがよくつて、それが一層この句の雰圍氣を助けるのに効果的だと思ひます。

路郎＝いまの艸樂君の話は、川柳の範圍を少し狹めて考へてるんぢやないかと思ふ。例を上げれば、日本料理が料理で完成してゐて、支那料理や、西洋料理がどうも完成した域でないやうに思へるといふ說明のやうにも受けとれた。或ひは例が拙いかも知れないが、川柳の領域といふものは過去に於ける領域が日本料理であるから、その境地を出たものは料理でないといつた見方でなく時代の推移によつて西洋料理を取り入れた日本料理といふものも考へる可きで川柳を擴めてゆく、そして川柳の新しい境地を創つてゆくのも差し支へないと僕は考へてゐる。でこの場合、この句が果してそうであるかどうかは言へないが僕は出來るだけ異つた雰圍氣に共鳴しつゝ選句し、採つてゆくので僕の句の好き嫌ひ、或ひは僕から好ましくないと思ふ句すら、その人の雰圍氣、その人の强調されたものと、やがて完成されるものだと思ふものはこれは選句するといふ方法をとる。偶々この句があつたので僕の選句方針を發表して置いたわけだ。

艸樂＝僕は、この句はこの境地をもつと進んで可いと思ふ――進める人は――しかし、先生の仰言るやうに川柳を次第に推し擴めてゆくのに作家も努力してゆくであらう、作家自身の努力の現はれとして此の句が出來たとしても、ある時代が來て万人の納得する句であるとは思へないと感じたんです。

路郎＝それから用語のヴエヂタブルサラダと川柳に就て少し言つときたい。特殊の言葉が出た場合のことだがネ。ある吟行に誘はれた時に、外國語をつかつちやいけないつていふ事になつて、バスと言はずに乘合自動車と言はなければならなかつたその人の氣持では、もつとも、ふさわしくない言葉だつたんだね。その意味から今の若人の使ふ言葉は、川柳の言葉とは全然雰圍氣の違つたものだ。だからある句に到つては、古川柳と比較すると川柳でないと思ふほどかけ離れてゐるが、しかし私はそれで可いのだと思ふ。ただ私はそれをどの點で川柳に入れるかどうかが問題なんだ。

銳々＝〃生ビール皆嘆つてる〃と同じゆき方ですね。

路郎＝それで、さきの句と違つて、ヴエヂタブルサラダは抽象的であつて成功してゐるとも言へるな。（同意の聲あり）さあこれ位で月評を止さうかね。

（巴鉾筆記）

川柳塔

‖路郎選‖

二千六百年昨日の姿そのまんま　堺　麻生葭乃

櫻貝を濱へ撒いて行つた人魚よ人魚よ

ハワイアンこなりし心の春の裏

藁屋根へ雪こ降れ〳〵冬の星　大阪　高橋かほる

梅子女史へ

見送れぬ譯を茶房へ云ひに寄る

春に又來るこ海鼠へ箸をつけ

夜行で發つ人こ來るなり小料理屋

姪はおめでた

三月に生れますねん手を重ね

柔道の稽古を覗く十二月

伯父チヤーンこ動の家を振り向かせ

統制に無口に成つて行く夫　大阪　奥村丹路

十二月わが耳垢におごろかせ

母のぐち聾になつてしまひたし

人形は冷やかにして笑ふのみ

盃を伏せ女房を案じさせ

トラックに叱られ紳士恙なし

病人へ馬鹿正直な顏を向け

朝風呂のないのに氣付くお正月　張家口　岩崎柳路

再度、大同石佛參拜(三句)

夕日赤々鼻がかけてる石佛

鳥居博士と會ふ

石佛へ博士佇んだまゝしばし

博士のお嬢さんへ

カンバスへ石佛さんの靜けさよ

醉ふてゐる議論を聞けばあべこべだ

辻占は凶でもてゝる面白さ

空襲は空襲こして×マス

義理の娘だ云ふまい煙草喫つける

踏みにじつた煙草を女横目で見　兵庫縣　寺井銳々

手相見こ拾ひ屋同じ電池持ち

貧相の見本のやうに易者佇ち

大道の易者の言葉さへ信じ

口で字を書く生活寒く見て歸り

ます〳〵孤獨なれこ雨の降る一夜

罵倒されエヘヽこ笑ひ金を受け

金は要らぬこいふ女にも金が要り

インテリのマダムへ好きな客が來ず　大阪　大西八歩

またゝきもはけしき處女の瞳なる　有馬溫泉にて

取卷へ追憶のある瑞寶寺

七寶へ目立たぬほごの塵が降り

朝の膳玉子のふれる音でくる

十二月芒へ白き風もなし　大阪　戸田孤蓬

朗かさ知らず見識丈高し　京洛五題

陵墓監靜かな午後は花も活け

美しい喪服こ出逢ふ鳥邊山

交叉點善男善女が叱られる

溜めながら貧乏ぶるいまだやめず

女房こ遍歷をする金を溜め

書記さんはすぎた美男をもてあまし

嫁入りの口までブローカするつもり　兵庫縣川西町　戸倉普夫

稅金に困つてしまふ程儲け

長養生働く事の樂を知り

同病が御灸の寺を聞きに來る

馬鹿だから勤まりますこ溜めて居る

道問へば妾も行くについて行き　大阪　橋本綠雨

杯を手に苦勞したこ子の前で

出前持のろひたくなるこごばかり

なんぼでも呑むこは事變わきまへず

高層建築ごつちから吹く風か　豊中　黒川紫香

誤解した電話は先でプツこ切れ

戸口調査巡査が笑ふ子澤山

債券の事も神樣賴まれる

給仕また私用を賴む聲を知り

質置いて素うごん喰べて戻るなり

生字引また榮轉を寒く聞く

肩書はあれご家賃は二十圓　大阪　丸尾潮花

年一度逢ふ娘の何處か淋しすぎ

逢へばすむ其の感情を恥かしみ　大阪　岩橋双虎

眞直ぐにきて食堂の隅で食ふ

プラタナス二人の仲へ影こなり

食堂の春を三男二女連れて

車掌さんが征かれるそうな貸切車

歸鄕

亡母抱いて海が淚の中にあり　大阪　岡田某人

嵩低う男不倖な年をこり

蜂の巢の如し大衆溫酒塲

口下手のつい雲ばかり見て暮し

元日を詩人はごてら着たつきり

應接の菊金策のむせかへり

お元日子を大陸の方へ向け

名を書いてお待ち申してゐる燒塲

押つまりましたこ懷手の二人

下駄の緒のかたさを注連の街へ出る

冬空の事無く暮れるあわび色

受付のインキねばつてゐる師走

安全地帶みんな冬陽へ背を向け

外交の居留守に馴れて振り向かず　張家口　岩崎松代

白米の切符制

米の票貰ふ役所も殖民地

節米の一人二合へガン張るさ

文子歸して(二句)

逃けて行く小鳥のあこを見てる窓

奈良漬は矢つ張り奈良漬だけの味　兵庫縣　田邊由布

戰線を思ひ豆炭一つ減し
すり減つて減つて師走のマッチ函
よごれてる方が儲けて來た乞食
ハイキングカメラ向けたい娘ご出合ひ　尼崎　酒井斗風

淨瑠璃の戀へアイロン置いて聞き
妓の懷爐借つて夜ふけの街歸る
債權者去んで工場の門しまり
共稼ぎ雨は降らないものご決め
義肢に馴れ友は戰火の詩をつくる
生きてゆく法衣ご知つて目をつむり
泡盛の鮮人あすも職があり
兵隊の匂ひ初發の滿員車　大阪　北川春巢

枕許へハンドバックを置いて病み
パーマネントが懸崖に似てる秋
帽子が嫌ひ赤ちやん父ちやんも
愛國歌洩れて押賣寄り付けず
告別式に行くモーニング風邪マスク
未亡人未だ洋書を手放さず
淑髪の揉めへ何にも云はぬ父
女學校の驛の改札羨まれ
月末の休みは貸家でも捜し

云ひたい事を云ふページ（其の四）

★

中原鉄人

川柳する樣になつて幾年、その本體も海月を摑んだ樣な感じ乍らも知つた。然し句は凡々とした境地から一歩も出ない、常にあきたらない感じを抱いてゐる。某日、商旅の途故郷へ寄る。「奔流や水と棹との力み合ひ」「百萬石何の糞喰へ釣の人」等默蛙の號で、一茶流の句を作る父へ「川雜」の評を乞ふ、と父曰く

太陽の熱を感じてゐる無口　アート

「これは禪味のある句だ、作者は禪をやつた人か、或は禪的素質のある人だ」私はアート君が禪を知つてゐるかどうかは知らない、年齢から押して恐らく禪を自覺されてもゐまいと思ふ。然し私はこの評から釋然としたものを感じた。昔から知名の士は多く參禪されてゐる。實業家でさへ禪的素質を大なり小なり備つた人々であつたと思はれる

その後私の小さな旅鞄の中に「碧巖錄」二册が大きな顏でおさまり込んで居る。

復寫紙へ責任を問ふ十二月　兵庫縣　水谷鮎美

十二月某日野球戰の人波
金策へ野崎の連れ彈きが聞こえ
電話では君の意見ごちごち違ひ
母の手をひいて男の氣がまぎれ　皇紀二千六百年

神光へ瞳をみひらきし大和魂
一羽二羽三羽四羽五羽宮鵜　大阪　姫田夕鐘

御賜の黄戴くだけにする
戰時下にボンビき屋ごはなさけなや
落松葉パーマネントへからみつき
横綱がべこり頭下げた人を見てゐたり
轢かれたかそうかご云ふて人だかり
わてらかて出征の兄を持つ島田　義妹嫁ぐ

主婦ごして非の打ごころなき梅の花
よんべの酒が今日のプランを零にした　大阪　須崎豆秋

五十錢札もわたしもくたびれた
元旦がすこし遲れる電氣時計
立話おこんにやくから汁が垂れ
モンペイはうしろを向いて紅をつけ
高等官食堂うごんをすゝる音

空襲のここは明かるいにぎり鮮　兵庫縣　水谷鮎美

チョン〳〵ご左ぎつちよで鮮を切り　大阪　後藤青兒

弟の戰死
萬歲は聖なりそして其の最後
新聞紙上に載せる寫眞に手が震へ
親も子も妻も忠義の中に入れ
英靈ごなりて還るも部隊長
傷兵の弔電もあり部隊長　松本　石曾根民郎

秋の陽に不在の友の家仰ぐ　善光寺に佇つ（二句）
何がための祈りかひごはうるはしく　長野を去る（二句）
たゞ秋の風に追はれて驛のひご
過ぎし日にふれて夜汽車は走り去る　大阪　正本水客

神殿の雪へ男の立姿
新婚らしい夫婦の横で氣がつまり
ケーブルは眞直雨のなかへ降り
眞心にまもられて死ぬ仕合せさ
年寄のあはれは新語なご使ひ
寒々ご女の足袋が忘れられ
物云ふが邪魔くさいごは贅澤な　長子出生の友へ
肺やんで寢てるこごさへ羨まれ
小兒科を探せば產婆ばかりある

我馬造

須崎豆秋

警察へ犬の戸籍をつけに行きました。「名前は？」「ガマゾーです」「けつたいな名やなア」「新水滸傳の主人公我馬造のやうに強くなれと思ひまして」。

饗應

橋本波夢造

昨秋某地に病を養つた時のこと知人の弟で附近の聯隊に目下應召中のK君が來て呉れた。

入營以來久方ぶりの外出だと云ふ、こちらは無聊に苦しんでゐる時の見舞客、大いに心嬉しく相手が兵隊サンだからソレすき燒ソレぜんざい風呂だ散髮だと宿の女中を叱してキリキリ廻ひするうち同氏の奥樣が見えた。どうやら營門を出ると同時に電話で呼んだらしい（限られた時間に遠方の自宅へ歸へる間を惜しんで近くに居る拙者の宿を見舞旁々家事打合(？)に利用したらしい事は後で判つた）

ソレ奥樣にはおすしお吸物と大いに饗應したつもりだが何だかモヂ〳〵してゐる。おとなしい男だつたが柄にも無く遠慮かと早合點した拙者盛に進めた大いに話しかけた。そのうちに早歸營だと云ふ。何となく兵隊サン夫婦も一つ浮かぬ顏をして居る樣に見える。これ丈もてなしたつもりだがと聊か不滿に考へてフト心づいた。

しまつた!!　確にしまつた!!二人丈の時間を饗應する事をすつかり忘れてゐた。折柄何よりの御馳走であつた筈の二人切りの時間を!!　しまつた!!　とつくづく拙者の不明を後悔した事である。

龍のおとし子

辰歲　水谷鮎美

龍は古來和名を太都（たつ）と言ひ龍の形に九似あり頭は駝に角は鹿に眼は鬼に耳は牛に頸は蛇に腹は蜃に鱗は鯉に爪は鷹に掌は虎に似てゐると言はれ髯は銅盤を打つが如きで逆鱗明珠ありてその性は雲を成し水に火に變ずとあるこれらは皆想像上のもので古來支那及日本の畫家彫刻家の作品たる龍は大體以上の記述を因として一種の靈通力を有するとし信仰を伴ひ神社佛閣に祠られてゐるものである。

阪神パーク水族館の龍のおとし子を見てゐると可愛いゝんです。

云ふぺージ
云ひたい事を
（其の五）

おみくぢ

中島生々庵

神社佛閣の境内によくおみくぢの箱が目につく。私は何時もその度に不快でたまらぬ氣持ちになる。うたぐりの淺間しさ、はからひの醜さを如何にも待ち受けた樣に立つて居るからである。數百尺の山を高しとせず、數里の道を遠しとせずにやつて來て今一心不亂お願ひの筋を申上げたとする。その額いた敬虔な姿その儘、お守りでも頂いて家路に就いたらいゝわけである。そこにおみくぢ箱が待つて居る。「ほんとに神樣聞きとゞけて呉れはるか知ら。一度お神籤引いて見たろ」人間の淺間しいはからひの姿である。神樣から返事を取つて歸らなくてもいゝではないか

――私は小兒科の醫者であるが親なり家族なりから「先生この子助かりませうか」とよく質問を受ける。その場合私はその人の顏をぢつと見つめて返事をしないか「助かりませんと申上げたらどうなさいますか」と反問するのを常として居る。そんな暇があつたら看護や手當の研究でもしたらいゝわけである。勿論親心としては一應受取れもする。が、つゞまり人世に對する生活態度の問題ではあるまいかと思ふ。

おみくぢを引いて見て、失せもの現れず病氣は見込みなしと出たらどうしようと云ふのだ。

――ところで、この私自身がおみくぢにも心を引かれたり、子供の病氣は惡い方に考え過ぎたり、ふら／＼の點では人後に落ちないお恥しい事を誰よりもよく知つて居る。皇紀二千六百年の空氣を呼吸して居る私達はなんとかして動きのとれない、確かな、そして少じでも淺間しいはからいのない生活態度と云ふものを持ちたいと冀ひ、精進したい次第である。

見合の印象

北川春巣

見合に行く時、顏に計り見惚れてゐないで、跛ではないか、吃ではないか、氣を付けて見て來い、と注意された男。歸つて來たので、印象を聞くと、相手が物を云つたのを嬉しさうに云ふ。何故かど問ふと、「チッとも物を云はぬので、テッキリ唖だと思つて心配してゐると、歸りがけに『さよなら』と云つたのでホットした。」

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（係）

催

▼川柳人協會主催の同情週間師走川柳大會が二日午後六時から大阪朝日新聞社三階大廣間に於て開催された參會者三百餘の大盛會▼六日夜尼崎住友金屬鋼管製造所親友會句會▼七日、二十一日夜有恒川柳會▼十日午後一時、二十日午後六時松坂倶樂部麻生路郎川柳講座▼十三日阪田オフイス川柳會▼十五日夜、川柳雜誌社月評會をフランス茶房階上に開催▼十八日夕阪大川柳會、以上何れも路郎出席

消息

▼姫田夕鐘君（大阪）は新春を德島縣穴吹村へ歸省される由。
▼白山五遊君（大阪）は小唄の名とりになられた。
▼出口夢郎君（青島）は滿鐵社員消費組合を十五年勤續の表彰を受けられたのを機會に辭職、青島へ移つて自家營業を開始された。發展を祈る。

慶

▼高鷲亞鈍君（大阪）は十一月二十五日長男盛造君を儲けられた

改號

▼大森千代香君は鳳來子
▼竹中アキラ君は顯

轉居

▼平田素天君は名古屋市中村區太閤通二ノ二二へ▼大森鳳來子君は廣島市京橋町五三弓場金物店内へ▼石浦征野君は大阪府泉北郡高石町南四七八井上方

★社告

▼十二月一日左記支部を開設した。鐵道病院支部。
幹事　北川春巣君
▼十二月末日左記支部を解消した。兵庫支部
▼大島濤明（新京）、藤本蘭華（京都）の兩氏から編輯部費中へ金一封を寄せられた。拜謝。
▼本社營業部に入り川柳人として將來を矚目されてゐた渡邊曉童君が健康すぐれず十二月廿三日退社、歸國後は從前通り川雜誌支部にあつて川柳に精進さる事となつた。本社在勤中特に交誼をたまはつた諸賢へ同君に代つて深謝する。

書け一斉に
全国便箋

適應症
動脈硬化症
狹心症
腦溢血
耳鳴症
血壓亢進症

加納和氣生先生自畫賛

（舊價格の約半額）
注射液　1.1cc 10管 3.80　1.1cc 50管 17.50
内服錠劑　60錠 1.50　120錠 3.30・360錠 7.50　500錠 10.50
内服粉末　25瓦 2.70　50瓦 5.30　100瓦 10.00　250瓦 22.50　500瓦 40.00

發賣元　大阪市東區平野町一丁目　白井松新藥部
代理店　東京市日本橋區本町三丁目　鳥居商店

書初で電話のかかる和正堂
書畫材料商
大阪心齋橋筋二丁目
電話南二七五番

髮の美はげに日本の姿なり

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ明朗な靑年美を創る

伊豆椿ポマード

伊豆椿香油本舗
大槻彩芳園

各地柳壇

いのちある句を創れ

理整秋豆・郎路

投稿清規

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

川柳 梅田支部句會（大阪）

十一月十五日　於　カナメ喫茶店　松枝靜波報

君と僕、押ピン、街の雜景、歸還兵、松茸、全快

君と僕いつものテーブルでのんでゐる　里十九
君と僕いつもの通り歩くなり　水客
下駄の番號忘れた君と僕　かほる
萩すこしこぼして君と僕の肩　潮花
紅椿君と僕との影へ落ち　紫香
君と僕恩師を問へば酒にされ　夕鐘
灯をかこむセンチもうれし君と僕　曉童
後悔は愚ろかな君と僕の膝　鮎美
先生の持つ押ピンへ生徒來る　紅多呂
新しい押ピンにする春のビラ　某人
あなた——妻押ピンの聲を出し　湖秋
押ピンで止めて幹事の氣がきまり　鮎美
押ピンを持つ手へ風が邪魔をする　南風
押ピンの寫眞は僕の第二世　斗風
押ピンで松茸うどん止められる　曉童
落選のビラ押ピンも腐りかけ　豆秋
水際の戀を見てゐる中ノ島　潮花
待たされる眼へアドバルン皺が寄り　大八
仔犬賣る舗道の隅にある日向　水客
寒むそうな修學旅行街をすぎ　曉童
ストップへ來て秋風を首に知り　某人
逢引を見付けて街の灯が暗し　鮎美
お茶のんで儲けてゐるも街のこと　靜波
消防自動車のあとへ自轉車よくつづき　里十九
兵隊が泊つた街を子と歩るく　斗風
簑蟲となり街路樹へブラ下り　豆秋
歸還兵背廣の腕を振つてみる　曉童
新聞をまだ讀んでゐる歸還兵　かほる
不愛想は前の通りの歸還兵　某人
歸還兵又誘はれる事があり　紫香
歸還してさつそく秋の鎌をとぎ　豆秋
松茸をわざ〳〵持つてハイキング　湖秋
こしらへた樣に松茸盆にのり　鮎美
松茸のにほひ晩飯みなそろい　方眠
松茸のすき兵隊を喜ばせ　寄與史
松茸へ一人欠げたは支那にゐる　曉童
松茸を買ふて市場の用がすみ　孤篷
松茸をさげて電車へこけて來り　潮花
冷酒がまわり松茸見つからず　豆秋
松茸の不作を詫びていゝ便り　水客
全快に妻がそろへた新の下駄　由布
全快をして南地まで歩かされ　かほる
全快の瞳に青空が廣く見え　斗風
全快も待てず商用いそがしし　方眠
全快の神樣といふものを知り　曉童
全快をないしよで知らすとこがあり　由布
退院へもう看護婦としてでなく　大八
全快を待つてた樣に金のこと　水客
丸刈にして全快はスツトした　豆秋
全快にもう白髮染などしてゐたり　夕鐘
全快に人手を借りぬ朝の水　鮎美
全快のふとぬく飯の湯氣にむせ　某人
全快だだが十一貫と何百目　路郎

川雜 今治支部句會（今治）

長野文庫報

入營、秋雜感、麥

入營だ牛にも秣やつて置き　心府
親方が祝つてくれた入營旗　同
勅諭みな覺へ入營待つばかり　文庫
入營の上等兵になるつもり　同
入營の挨拶をするビール箱　向上庵
入營へ大陸の夢見續けて　同
伸びた髮入營兵が刈りに來る　清
演習の擬裝に菊の花をつけ　心府
大根の白さへ多が迫り來る　同
秋キモノ着てから女女らし　文庫
伸びた丈け切り落とされるプラタナス　同
麥蒔きを終り銃後の便りする　心府
麥飯で太り甲種を疑はず　同
麥まぜた黑いおすしも銃後なり　向上庵
麥が未だ少ないと思ふ入營兵　同
恥づかしくない麥入りの振り飯　文庫
麥壽司が案外うまい百貨店　同
麥粒が顏に殘つた三ツの子　清

川雜 蒙疆支部句會（張家口）

十一月十九日　於　柳路居　岩崎柳路報

ピクニツク

ピクニツク確か豫報は晴れてゐた　默人
ピクニツク脚氣の足を押してみる　桃次
ハイキング寢た子へ草の風が吹き　麥秋
ピクニツク唯雲だけを見て歸り　滿蹊郎
ハンドバツクに栓拔もありピクニツク　柳路

遠慮（十二月三日）

金借りるまで惡友の遠慮がち　柳路
外國へ遠慮するなと時局論　同
遠慮しながら課長へパチリ王手飛車　同
病人の有るを氣付いた話聲　松代
初七日も濟まず催促遠慮する　幽鳳
無遠慮に早い話が金を借せ　桃水
遠慮したおかげて厄をのがれたり　みのる

防諜（十二月十日）

國事多端そら防諜だ檢閲だ　柳路
モスコーは又暗號を變へたらし　同
防諜のポスターと呑んでそれでよし　松代
そこからは機密に屬すとうまく逃げ　默人
先生に聽いたと防諜子が教へ　同
外人が來て戰爭の話やみ　支那子

人形（十二月十四日）

ウインドの人形へ踊の春が來た　柳路
人形と寢てゐる部屋に鳩時計　同
嫁ぐ荷に人形も入れる娘の心　四絃
病んでる子淋しく人形に話してゐ　默人
射的場あの人形を落すまで　支那子

川雜 上海支部句會（上海）

十一月十五日　於　九天居　奥富天作報

宵寢、獨酌、割込

緣談に氣まずく宵寢させられる　みどり
風邪氣味の宵寢は故鄕のことにふれ　のぶ子
立哨の聲にすまなく宵寢する　天作
宵寢して爪の長さが氣にかゝり　九天
獨酌の月雲に入り雲に入り　のぶ子
獨酌の夫へすまぬ意地を張り　しげる
あきらめてゐて獨酌のぐち多し　九天
獨酌の窓へお月樣が欠げ　天作
割込んでみて空想とかけはなれ　みどり
割込の話やいとの効くはなし　九天
割込の合宿訛り眞似られる　天作
割込がもつともらしい申し分　同

川雜 北大阪、港支部句會（大阪）

黑川紫香報

教室、甘酒、夢、物足りぬ、先廻り、落葉、駐車場

教室へ集る今日はクラス會　鈴峯

敎室で貼り出されたと兒の笑顔　松徑
試驗すみ敎室出るや本を見る　靜子
先生が見えず敎室おさまらず　水坊
敎室の窓なつかしき歌を聞き　湖秋
卒業が近く敎室靜かなり　曉童
敎室の喜び遠足の日は近し　アート
敎室へ殘り手紙を書いてゐる　曉童
よく判いた生姜甘酒吹いてのみ　安兵衛
甘酒を手に傳說を聞いてゐる　万的
甘酒に他人行儀の夜が更ける　綠水
甘酒に宵の炬燵をぬけて來る　潮花
甘酒を二杯も飮んだ歸り風呂　翠花
舊道を甘酒茶屋へ廻るなり　水客
甘酒を老妓二杯目をたのみ　曉童
勤めする姉は甘酒云ふてくれ　紫香
明方の夢の通りに客が來た　一笑
朝風呂で樂しき夢を憶ふ也　アート
氣懸りな夢で女は會ひに來る　水客
戀の夢山は靜かにあけかゝる　潮花
いゝ夢を見ろと別れた難波驛　紅多呂
いゝ夢はみんなに話してしまひ　紫香
物足らぬ儘で夜汽車に搖れてゐる　水坊
物足りぬまゝに揚子をくわへて出　紫香
先廻り奴凧が落ちてくる　しげ子
先廻りしてやられたるきのこ狩り　一笑
先廻りしたのが笑つて待つてゐる　万的
先き廻り小道の花を摘んで待ち　潮花
先き廻り辨當下げて來てくれる　水客
さら／＼と步哨の足を舞ふ落葉　潮花
薄倖の墓石へ落ちる葉が一つ　紫香
國體へ車が足らぬ駐車場　波矢子
親と子と異ふ氣で立つ駐車場　綠水
駐車場喪服へ冷い風が吹き　月都
いやになる程も步いた駐車場　南風
自家用がむきを變へてる駐車場　一笑
駐車場でバットの空にふと氣づき　曉童
駐車場華でな模樣の後で待ち　一房
駐車場の灯で勘定書を見る　潮花
駐車場向ひ側はよく止り　曉童
コンクリに油がにじむ駐車場　紫香
駐車場男は少し醉ふてゐる　万的
駐車場意氣投合の士が並び　水坊
駐車場の女の方が手をあげる　水客

雜川 **竹原支部句會**（廣島）

漫才、汗、浴衣、にぎりこぶし、噂、羽織　黒本芳泉報

漫才師羽織を脫いで面白し　芳泉

非特異性全免疫元
オムニコンメッド
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症拔萃）
流感、各種肺炎、肋（腹）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓄膿症、其他外科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に涉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絕無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包裝）
二cc五管入　二cc一〇管入
二cc五〇管入　二cc一〇〇管入
一cc一〇管入　一cc五〇管入
發賣元 株式會社 黒田藥品商會 大阪・東京
—文獻贈呈—

醜男を心得てゐる漫才師　みづほ
むつゝりと出番待つてる漫才師　芳郎
赤ん坊の汗大仰に拭きとられ　同
惜敗の汗痛々しユニホーム　同
軍服の汗へすまない氷水　愛鳩
國道の松に一と汗入れて行き　みづほ
新記錄カメラへ笑ふ汗の顏　同
汗臭い手に光る日給　芳泉
いゝ天氣夫の浴衣子の浴衣　同
凱旋は浴衣のあぐら嬉しがり　芳郎
貸浴衣お國言葉ではゞからす　みづほ
浴衣着て話してみたい女なり　愛鳩
うやむやに握拳をおさめさせ　芳泉
母さんの拳骨なんか恐くなし　みづほ
告別のラッパへ涙をふくこぶし　芳郎
色々な噂の中に左遷され　芳泉
ハイヒール噂の中へッンと來る　みづほ
隱藝羽織を脫いで立上り　同
產月へ羽織の紐が伸びるなり　芳郎
人絹の羽織で坐り樣があり　同
後ろから着せる羽織にある餘情　芳泉
他所行きの羽織で今宵も出る若さ　同

雜川 **塗青支部句會**（大阪）

十一月八日　於染料會館

我儘、悧惚、言譯、秋、恩　淺謙公報

重役と云ふ我儘を通させる　ライト
何も彼も我儘でしたと墓の前　謙公
末ッ子の我儘みんなで聞いてやり　同
我儘で困る母親同志なり　松太樓
折角の柄が我儘氣に入らず　光路
我儘が都會に狹く住んでゐる　黄鶴
幸福はまだ我儘を通させる　松太樓
我儘を通して後のつらい事　ふえ
悧惚れは長い電話となりにけり　黄鶴
悧惚れの嬉しく聞いた無心なり　ライト
言譯を考へてる間に來てしまい　ふえ
言譯を課長とに角聞き流し　重夫
言譯も上手になつて世帶染み　謙公
靑筋の太さ言譯見逃さず　光路
言譯の疑られてる新世帶　ライト
言譯は脊中を傳ふ汗と知り　光路
言譯に困る現場を見付けられ　松太樓
心落着けよと秋の空澄めり　香林坊
嫁姑笑つて食べる秋なすび　同
秋の日をするきもなく煙草つけ　ふえ
故鄉へ續くレールに佗びし秋　香林坊
秋の陽はリユックサックに暮れかゝり　技折
發奮の丸刈り寒し秋の風　黄鶴
秋風に仕舞殘した簾が搖れる　光路
逝く秋へ亡き妻の鏡ヂット見る　謙公
一生涯恩に被るよと借りて行き　技折
恩人を訪ふ手土產を叱られる　松太樓
恩を知り過ぎて三十まだ立てず　ふえ
一杯の水うれしくも恩に被る　ライト
恩人のせめて肩でも流したし　黄鶴
天恩に生きて番茶の時を知り　光路

雜川 **鐵道病院支部句會**（大阪）

田舍道、食慾、靴、暗がり、スヰッチ、肖像、消毒、釘、順番、手心　北川春巢報

田舍道大きな息を吸つて見る　久枝
田舍道急いで行つた里歸り　水虹
さつきのバスがパンクしてゐる田舍道　春巢
何か田へ逃げる音する田舍道　某人
田舍道二人默つて步いてる　万的
爆音を見上げる麥の穗がたはは　水客
ランチ殘さず食べて相手の顏を見る　万的
此の頃は食氣一方ですと顎を撫で　噓川
嬉しい返事食慾が增し　桐
食慾へ出された茶碗小さ過ぎ　久枝
重役は食慾の爲にテニスをし　山椒
食慾を看護婦さんに笑はれる　水客
旺盛な食ひ氣浴衣の胸があき　某人
禁煙のそれからこはい程食べる　春巢
戀人と散步の靴へ砂が入り　同
秋の蚊が靴を穿く手へ一つ來る　水客
新しい靴でつまらぬ街を行く　久枝
暗がりで靴をしつかり穿いて出る　同
暗闇で泣いてたらしい眼の赤さ　水虹
暗がりの中を煙草が一つ來る　春巢
暗がりにして見廻りの守衛出る　某人
暗がりに巡査の足音だと分り　春巢
叱られた夜氣付けば闇に立つてゐた　万的
暗闇へ浴衣の胸白く浮き　桐
まつ暗がり相手もこちら見てるらし　万的
スヰッチを捻る女の丈高く　噓川
スヰッチを捻れば鼠の逃げた音　水虹

ニュースだけ聞くスキッチを入れに立ち　柳太
スキッチの音夜の客送られる　某人
肖像は祖父の目元に生寫し　空頭
肖像に蝿動かない十二月　某人
家を賣る話の上の肖像畫　同
肖像にまで差押へ紙を貼り　久枝
肖像はたゞやかましい父だつた　曉童
恩師今日肖像となる除幕式　柳太
お隣りへ市の消毒が來た眞晝　春巢
支那歸り消毒濟みの荷をほどき　某人
表情もなく消毒をして歸り　曉童
リゾールの香は醫師を言ひ當てる　嘘川
釘を打つ物干臺は晴れてゐる　昶祐
釘を拔くコツが小僧に分りかけ　春巢
轉宅の釘五錢程みんな打ち　曉童
打つた釘横に外れてる棚を吊り　柳太
此の邊に欲しいと思つた釘を打つ　竹鳴
古釘は役目果した音を立て　同
蚊帳を吊る釘だ其の儘おいておけ　曉童
額を吊る釘は下から指圖され　久枝
此の釘は簾を掛けるだけの釘　竹鳴
燒跡の釘濡れてゐてうそ寒し　某人
順番の列に割込む厚顔氏　登龍
樂屋裏鬘を脫いで出番待ち　紫花
小兒科の小供は順に泣いて出る　竹鳴
一番を競つた友は胸を病み　嘘川
診察の順番ひげも待たされる　久枝
枕元順番に置く土產物　曉童
父死んでみな一番が僕に來る　春巢
手心を加へたらしい賞與金　柳太
若いお腹へ外科は手心　桐
負けてやる相撲兒の手の柔かし　某人
手心もあつて幹事の行届き　曉童

阪大川柳句會（大阪）

十二月十八日　丸島利生報

柿、敵

果物屋疵ある柿は向きを變へ　柳秀
干し柿のあたりに夕陽まだ殘り　栞
吊し柿にさも似て乳房老ひにけり　方正
澁柿をかぶつた唾は派手に吐き　利生
母と子と事なき夜の柿をむき　柳秀
柿にまでナイフをそへたAランチ　同
落ちさうな柿をハイカー撮つて去に　水虹
脊の子に隣の柿をせがまれる　同
吊し柿算盤玉の影をなす　栞
戀敵俺より矢張り偉い也　方正
敵のない强味市長の椅子に居る　水虹
敵討赤垣源藏もあつてよし　利生
蔭口をきくも商賣敵なり　柳秀
軍服で挨拶に來た戀敵　水虹
敵の手も讀んで端歩を輕く突き　利生
敵味方舞臺の裏でお茶を呑み　香附子
筆談でペンチヤラを云ふ敵の捕虜　春巢
政敵の不遇いたはる圓熟さ　筑川
いつからか丸刈にした戀敵　春巢
けなげにも覺悟を決めた捕虜の口　柳秀
政敵の手腕をほめる年になり　利生

松坂倶樂部川柳講座（大阪）

十一月五日　石井白面人報

バリカン、紅一點、天窓、鮓

虎刈を承知バリカン借りにゆき　くもを
村だとて電氣バリカンうなつてる　孤蓬
虎刈を覺悟で丁稚刈られてる　同
バリカンの音が年期をきざんで居　美根子
節約の一歩バリカン買つて來る　同
子の機嫌とり〱バリカン動いて居　同
バリカンにいまだ冴えない妻の腕　同
日曜だ雨だバリカンの手ならしだ　同
バリカンがうれしい父の若さなり　路郎
紅一點燒くに阿倍野の大構へ　くもを
心臟の强さを見せて紅一點　美根子
辨當をたもとでひらく紅一點　孤蓬
紅一點見ぬ振りの眼にかこまれる　同
紅一點カルカン事件責めて來る　同
紅一點酒もすこしは飲ける口　白面人
紅一點つゝましやかに酌いでくれ　同
紅一點勝氣だと云ふ噂なり　同
紅一點へ親切なのが一人居る　白面人
紅一點ヤンヤヤンヤの中へ起ち　同
紅一點と云はれ四十は越してゐる　路郎
紅一點が下りて新聞讀みはじめ　同
紅一點いさゝか自負がないでなし　同
屋台ずし賣つた昔もあつたのさ　美根子
妻の客夫鮓屋へ走らされ　同
寢起きの顏へ鮓を突きつけ　白面人
鮓提げて歸れば子供寢たばかり　同
蝿だけはこさせずはやる屋台ずし　孤蓬
鮓買つて歸れば明日雨となり　同
米不足鮓もだんだん統制か　普天
招待會壽司受附で渡される　同
生醉のころんでもころんでも鮓を抱き　くもを
應揚に出すは鮓屋の上り花　同
もういか鮓の食ひ切れぬ母　同
寢ころんで見れば天窓星が見え　同
夜業の灯天窓からも洩れてゐる　美根子
天窓の下の机を思ひ出し　同
天窓に突き當つてる赤とんぼ　普天
天窓の部屋に店主が苦り切り　同
天窓の奧の一間に計算課　同
天窓の雀を泣いた眼に見付け　白面人
天窓から猫侮つた顏を出し　同
物騷な話天窓氣にかゝり　同
天窓の眞下へ針差持つて來る　孤蓬
天窓が一つ都會の底に住み　同
大店の奧へ天窓一つつけ　同
管制を天窓吳座で濟まされる　同

高槻笠森稻荷、牧方吟行（十一月十九日）

菊、後ろ姿

賞められてやらねばならぬ菊となり　耕二
菊作る翁は從四位勳三等　美根子
宣傳の驛の菊でも見ておこう　孤蓬
痩せてゐる兒童の菊は捨てられず　同
菊一輪に金にもならぬペンを持ち　丹路
「床の菊」に「軸の達磨」に威壓され　同
憲兵があつちむいてる朝の驛　孤蓬
振り向くな後ろ姿のまゝでよし　耕二
後ろ姿拜みたくなる母の老ひ　生々庵
後ろ姿別れた人に似てゐたる　白面人
ボーナスの後ろ姿を追ひかける　方正
肥つちよの後ろ姿は親しまれ　丹路
人を待つ後ろ姿も十八九　同
惡友の後ろ姿を見失ひ　同

戰線への慰問には
柳誌・柳書を！
兵隊さん寒いでせうと出したのに
蚊が出てこまると返事來るなり
と違つて、いつ着いてもよろこばれるのは
「川柳雜誌」に「新川柳評釋」です。

有恒川柳會（大阪）

十一月九日　寺井鋭々報

小金、青疊、大阪

小金貸す噂餘計な腹を立て　波夢造
女房を一寸拝んだ二十圓　同
小金では出來ぬと柱撫でられる　同
小金持つてゐそうな顔へ役を振り　鋭々
相談へ小金のあるが口出さず　同
小金持つてゐるとか老妓よく肥り　同
小金持ち綜合課税を苦勞にし　羅漢
小金もつ後家は近所とつきあはず　同
月給は多いが小金借りてゐる　至藝瑠
のさばつて居る女房は小金持ち　同
小使の小金へ罪な金を借り　朴堂
退職の金に小さい野心あり　同
今日はまた新聞代をもぎとられ　路郎
それ位ならと女房の方が出し　同
青疊家守の誇る程でなし　波夢造
青疊建具は明日這入ります　同
衣摺も祝ひ事らしい青疊　鋭々
疊替へて古ぼけて見える床の軸　同
青疊に替へて出産待ちかまへ　羅漢
青疊ふとんもなしに横になり　至藝瑠
疊でも青いまゝでは居りません　同
これからは隱居で暮す青疊　朴堂
書初めの墨が氣になる青疊　同
お歳暮をどしりと置いた青疊　路郎
足ることを知つた平家の青疊　同
何を苦んでか大阪で狹う住み　至藝瑠
大阪で損をする事だけおぼへ　同
大阪で住めば田舍に居て住めず　同
大阪へ行つたとばかりそれつきり　路郎

十一月廿四日　末ッ子、優勝、病院

團欒の王座末ッ子獨り占め　漢羅
末ッ子が出世した頃親は亡し　同
末ッ子丈を連れて來ました墓參也　波夢造
末ッ子は皆學校と撫でられる　同
見世物の樣に末つ子のぞかれる　同
末ッ子は母の病に嫁きおくれ　同
末ッ子は髭生しても小坊ンさん　水棹
末ッ子の乳母なかなかに負けて居ず　同
末ッ子が毀したことにして濟ませ　鋭々
末ッ子はキヤッチボールの邪魔にされ　同
末弟の出世へ兄は田を守り　至藝瑠
荷飾りは末ッ子だけがしてもらひ　平三
末ッ子が一番先に膳に付き　羅漢
お父さん優勝をして內祝　同
優勝者テレてカップを持ち歸り　同
上氣した頰を優勝ぐつと拭き　波夢造
優勝は笑へ笑へと撮つされる　同
大廣間優勝らしいデッカンショ　同
優勝が怪我勝ちですは奥床し　水棹
優勝の選手拍手の波をぬけ　鋭々
優勝へ眞つ先に來る寫眞班　同
優勝で一寸謙遜して語り　平三
優勝を我事の樣に觸れ廻り　同
御藝で優勝ですと胸を張り　至藝瑠
優勝だ今日はまともに歸らぬ氣　朴堂
病院の白壁無慈悲のやうに見え　羅漢
看護婦の溜りへ屆く蜜柑箱　同
病院の見舞に馴れて撰る草履　同
病院を出て太陽の有難さ　同
病院を我家にしてる不孝者　羅漢
病院に入つた氣でも働けず　平三
病院と自宅態度が違ふなり　同
病院の窓退屈なアドバルン　鋭々
病院で花に親しむ趣味が出來　雨月
ボソ〳〵と話して面會謝絶なり　同
病院の名前はゞかる藥瓶　同
お見舞に來た病院はきれいなり　至藝瑠

ちぬの海川柳會（大阪）

十一月二十五日　於高師の濱　米本氏邸

石井白面人報

襖、砂濱、事務所

膝ついて襖をたてし友の家　儀助
地圖張つて借家の襖慥がなし　孤篷
太閤は五三の桐の前に座し　同
大旦那襖の內で咳拂ひ　貴志子
居催促襖の引手取れてゐる　同
病人に云へぬ襖のそとのこと　白面人
襖まで來てから先を讓り合ひ　同
砂濱やたゞ雲を見て波を見て　同
到來の品は事務所へまで運び　葭乃
假事務所ガランと社長東上中　白面人
假事務所今日も仕事をせずに暮れ　同
事務所から見ると向ふも暇らしい　同
名計りの事務所を置いて裏をゆき　貴志子
ボーナス日事務所の時計止つてる　同
稅務官事務所一ぱい肩を張り　同
事務所ふと女の顏を思ひ出し　孤篷
書き出しは事務所の方へ廻しとき　同
生きるため丈に事務所へぶら下り　同
事務所から道頓堀へ退けてゆく　同
居殘りの灯がボッネンとビルの窓　同
事務所の隅のうどんやの鉢　路郎
事務所ではがき一枚無駄をせず　同

よつばし川柳句會（大阪）

橋本綠雨報

腕章、嘘

街頭で腕章固くなつてゐる　山人
腕章は責任のある氣で出かけ　秀甫
晝食に腕章だけは殘される　後山
腕章を嵌めて姿勢が變りたり　一林
腕章の姿凛々しい防火班　輝翠
非常綠腕章で無事通り拔け　吉現
腕章をつけた若衆男前　一志
腕章の色で役目が違つて居　聲香
腕章が號令かける防護團　秀峰
細い腕に腕章目立つサービス嬢　糸柳
不案內腕章を見て尋ねて來　一重
腕章と腕章意見チト違ひ　綠雨

重役會議一決！

能率の良さに
あきれて御詫文

事務用高速度印刷機
面白い程能率が上る
定價百八十圓

大阪市北區上福島北二丁目
發賣元　株式會社　阪田商會
電話代表福島二三五一

懸賞川柳

課題「紀元節」一月十日
「帶」二月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先　堺市出島町三五一番地
不朽洞
★化粧新聞社柳壇へ

腕章を見て團長の顏を知り　翠芳
腕章も色とり〴〵の防護團　壽堂
横着の出來ぬ腕章つけて居り　靜峯
腕章はどんな話もつけに出る　秋意
彌次馬の中で腕章口が過ぎ　七夫
腕章を附けて市長が若く見え　芦穗
嘘上手親を泣かせて遊ぶなり　一志
スパイには嘘も誠もピンとくる　七夫
母親に小使ほしさの嘘を言ひ　朗舟
嘘言も一寸出て來る旦那なり　靡香
今日も又あの手でだます胸算よ　山人
嘘を云ひ後の氣持の惡いこと　壽堂
眞に受けてつい嘘つきにつり込まれ　一重
斷りに本當らしい嘘を言ひ　糸柳
嘘つきはまことの事を嘘にされ　秀甫
心にもなき嘘をつく親心　秀峯
噺家は嘘を上手に聞かしてる　翠芳
嘘々と父の膝にもたれて來　絲雨
嘘言ふた弱味とう〳〵奢らされ　芦穗
憧れの都會で嘘と酒を知り　芳人
一應は嘘も聞いとく腹が出來　同
嘘言ふた後の不氣味さ二三日　輝翠

雜川　廣島支部句會（廣島）

十月二十八日　濱田久米雄報

ニュース映畫觀賞

ニュース館新聞でみた場面が出　久米雄
出張の鞄を膝にニュース館　同
軍裝を解かれた足の涉らず　同
抗戰の無駄ワルソーの陽が靜か　同
勝つ者が勝つた廢墟の薄煙　同
ふとニュース見る氣になつて足もら　伯峯
戀人を待つ顏もみるニュース館　同
踏鐵の砂塵を蹴つて迫りくる　同
夕陽いま赤く戰禍の地に沈む　同
丙種の身相濟まぬ氣で見るニュース　同
檢閱にかかつたらしいとこで切れ　千代香
用のない顏が集るニュース館　同
砲聲のない國境へ風すさみ　同
戰線へ便り出す氣になつて出る　同
擔架今悲哀の曲となつて出る　同

雜川　鶴町支部句會（大阪）

十二月十三日　於双虎居　岩橋双虎報

冬の雜吟、二日醉、目的、百姓、證人、發表、夢

目的は樂しキットの靴が鳴る　八九滿
目的がはづれ淋しく歸るなり　巨人
目的があるのでもなく街へ出る　京詩
目的へもう一息の良い景色　小柳子
ハッキリ云つてお茶を飲み　双虎
目的へ髭だけそつて出かけたり　ライト
女の子三ッ豆だけが目當なり　謙公
目的があつて手土產さげてくる　香林坊
目的へ人のそしりを耳にせず　よし美
百姓をハッキリ見せた土產もの　同
百姓も居らず迷ふた田舍道　同
百姓のもう正月を待つばかり　小柳子
君だけに話せる夢へ星が呼へ　双虎
恐ろしい心は夢になつてゐる　巨人
證人がグットにらんだ被告なり　よし美
タクシーが無茶やと運轉台の聲　ライト
動かせぬ證人が出て恐れ入り　謙公
證人と云ふのがキッイ吃りなり　八九滿
好きな娘が好きなオーバ着て通り　光晴
乘り切れぬラッシュアワーへ冬の雨　謙公
挨拶の變りに寒い聲を出し　双虎
フト馬のつく息白し冬の朝　松太樓
冬の田のひろさ勿體なく思ひ　京詩
迎ひ酒女房をだます智慧が要り　彼人
二日醉禁酒と書いて壁にはり　同
見送つた歸りに濟まぬ二日醉　光晴
仁丹でごまかす氣なり二日醉　同
二日醉隣にわびることもあり　八九滿
二日醉だけでは濟まぬ朝になり　京詩

雜川　北大阪、港支部合同句會（大阪）

丸尾潮花報

禿、得意、障子、質屋、鶯、喜ぶ、眼、歌手

御燒香一番も二番も禿てゐる　万的
こゝ分けてくれは小禿があるのなり　同
愛人に小さな禿を見つけられ　潮花
禿かたもやつぱり祖父に生きうつし　湖秋
尋ね人禿の吋も書いてあり　紅多呂
禿かけてからを主任の椅子へつき　潮花
叱られてゐるのへ禿が眼立ちすぎ　水客
公休は妻の得意と云ふ料理　湖秋
賞品を子が見せに來る父兄席　紫香
衣づれの音で障子へ影が出來　一房
障子あけよう幸福が待つてゐる　アート

後記

▲柳運長久の旗下に聖戰第四の春を迎へた紙上から諸賢の御健勝を壽ぐ。

▲本號から毎月一日發行に改めた。近來本誌は逐號の發展は目覺ましく興亞建設と足並みを揃へた觀を呈し、新春號は又々増ページ増刷であるる。趣味陣營のため同慶に堪えない。

▲本號の表紙は大同の九龍壁である。辰年に因んでこれを採擇した。前面に立つてゐるのは小生で、撮影は岩崎柳路君である。

▲日評「川柳一ト筋」評者諸氏の熱の昻揚と正比例して好評嘖々だ。一月にはもつと一般論的な座談會にしてはと云ふ意見も出てゐるので一考して期待にそふ積りだ。

▲新春の讀物として特輯原稿「云ひたい事を云ふページ」の寄稿を多數の方々にお願ひした。こころが思つたよりも多數の方々から硬軟長短とりどりの好讀物を寄せられたので御好意に感激してゐる。乘り遲れた方々の分は何れ次號で「續云ひたいことを云ふページ」を發表することにした。諒とされたい。

▲「研究と雜文のページ」は岡田某人、福田山雨樓、佐々木三福、姜弘龍、蛭子省二の諸氏が轡を並べての出陣譜だ。

▲戸田孤鐙氏から「川柳二千六百年史」の寄稿があつた。京大で經濟史を專攻だつた孤鐙氏が川柳で詩の上に二千六百年史を築き上げやうとと云ふのである。御愛讀をたまはりたい。

▲本號は記事、輻輳のため「社會ページ」「類題と例句」「演藝映畫に川柳を觀る」等々を割愛した。なほ誌面の都合で「川雜案内を」休載した。

▲我社では二千六百年の記念事業を取纏めて豫告こそしないが本年は、かなり事業部は活躍するだらうっ發表の都度、御支援御鞭撻を切望する。（路郎）

建國二千六百年記念「柳誌皇軍慰問」

★戰線の將兵に「川柳雜誌」を慰問品として御發送になりたい方は（一）柳誌慰問發送者名・雅號・住所（二）慰問柳誌の受取人の氏名隊名又は住所を明記（三）「川柳雜誌」の號數部數誌代前金（郵税本社負擔）で本社內柳誌皇軍慰問係宛に御申込になれば本社は代理發送の手續をいたします。一部からでもお取扱ひいたしますが二千六百部に達したら打ち切ります。慰問誌發送者名及び部數を毎號誌上に發表いたします。至急御申込み下さい。

募集

第十七卷 第二號課題

一月五日締切 （十句以內）

建國祭　前田五健選

魚串　妹尾八九滿選

第十七卷 第三號課題

一月末日締切 （十句以內）

光　奧村丹路選

診察券　北川春巣選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選

川柳塔　麻生路郎選

同舟近詠

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十四年十二月廿八日印刷
昭和十五年一月一日發行
第十七卷 第一號（毎月一回一日發行）

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀 三三三三番・八一六三番・八一六四番
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

本誌の刊行は保證有新聞紙法に據る

賣捌書店

（大阪）參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店　其他市內各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店（函館）玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文舘　石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

社關係の人々（いろは順）

主幹　麻生路郎

贊助員　池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　顯原退藏

客員　淺田一　末弘巖太郎　鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　龜井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　生方敏郎　高尾亮雄　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美

不朽洞會員　前田雀郎　前田五健　柴谷寧二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　小林不涙人　森東魚　橋本絲雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井銑々　大西八歩　高澤一涙

戸田孤鐙　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　上田耕二　戸倉普天　★北山悟郎　水谷鮎美　姫田夕鐘　村松蓼裡　市塲沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　松下小柳子　西いわを　後藤青兒　宮岡白峰

石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　黒川絮香　丸尾潮花　大坂形水　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　田中雨月　平佐平三　橋本波歩造　藤岡至藝瑠　増元翠陽　田邊由布　酒井斗風　天野卜居　北川春巢

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
函館支部（函館市）　龜井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
簸川支部（島根縣）　尼緣之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　矢野虹之麿
天王寺支部（大阪市）　妹尾八九滿
鶴町支部（大阪市）　岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川兒
大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井奕賀夫
今里支部（大阪市）　市塲沒食子
今治支部（今治市）　長野文庫
光笑會（大阪市）　永田里十九
竹原支部（廣島縣）　黒本芳泉
十三支部（大阪市）　淺野牧人
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車
北大阪支部（豐中市）　黒川紫香
港支部（大阪市）　多田一波
下關支部（下關市）　多田市多樓
北鮮支部（清津府）　三鴨美笑
蒙彊支部（張家口）　岩崎柳路
上海支部（中華）　植山九天
鐵道病院支部（大阪）　北川春巢

幽雅な日本座敷
純高級支那料理

大阪うつぼ
黄鶴樓
電話土佐堀 七五四 二七一九

御宴會に
御商談に
御家族連れに

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

楢林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

片瀬醫學博士述「安産のために」一冊呈上

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年十二月廿五日印刷納本　昭和十五年一月一日發行

川柳雑誌　NO・192　定價金30錢　送料壹錢

ニキビ

にきびと

美顔水

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ゼヒお勧めしたい薬！

吹出物にゼヒ此薬を

美容薬としても

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスッキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫てカユイ時にもとても便利な薬！

アブラ顔のお化粧下に最適！

化粧用美顔水